
学園石井録

佐藤太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園石井録

【Nコード】

N78750

【作者名】

佐藤太郎

【あらすじ】

何度死んでも転生を繰り返す主人公、そんな時あるアニメのモブキャラに憑依してしまう。名前は石井和樹：学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEADの2話にて死んでしまうキヤラだった！なるべくアニメの方に沿って行きたいです、文章下手だったり更新不定期です。

追記、なかなか本編が更新されない…しょうがないので適当に作った外伝晒します。

期待しないでね。

新作メインなので更新亀過ぎです、よろしく。

第1話（前書き）

アニメ見ないと分からないかもです
それでもいい人や見た人はどうぞ！期待はあまりしないように！

第1話

全てが終わってしまった日の前夜、俺は初めてエロゲーをした。

初めてと言ってもこの俺、石井和樹いしかずきの人生観ではって言う意味だけど。

前の人生ではそっち方面も結構好きだったみたいだ、所謂オタク？に入るかもしれない。

こんな変な言い方をしたのは理由がある、どうやら俺は生まれ変わりと言う奴を体験したようなのだ。

つまり、石井に生まれた時点で他の人の記憶があるって言う状態。

最初は輪廻転生ってあるのねーとか驚いてただけど、どうも違うらしい。

違うと気付いたときにはもう高校生だったんだ、時が経つのは早いね。

藤美学園入学式当日、そいつ等は居た。

小室孝、宮本麗、毒島冴子、平野コータ、高城沙耶、鞠川先生。

これだけ揃っていれば分らない訳が無い、瞬間で悟ったよ。

ここは、学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD の世界。

前の人生で見たアニメの世界なんだと。

もし此処が本当に学園黙示録の世界なら俺（石井）は、アニメ二話

で静香先生を庇って死ぬ。

なんて最悪なモブに憑依してしまったんだ…。
このままだったらもう直ぐ俺は死ぬのか。

「って待つてくれっ！？また死ぬのか俺っ！！
嫌だあああっ！！」

叫んだ所でどうしようも無いのは分かってる、でも理不尽だろおおっ！！

死にたくない、だって二度目の人生だもん、天寿全うしたいもん！

そこまで考えて気付いた。

「そうだ、俺にはこの世界の知識があるじゃないか、
しかも俺はイレギュラー、原作介入すればブレイク間違いなし！！」

ちなみに学園黙示録は三話らへんまでしか見てない、飽きたんだよね。

最初に正門に現れる「奴ら」を仕留めれば感染拡大は免れるかもしれない。

俺が強くなれば鞠川先生を守りながら戦えるかもしれない。

取り敢えずの俺の目標は原作を展開させない事に決定だ。

で、どうする？流石に行動には早過ぎる…。

桜が咲いてたから春だろうけど、まあ一年あるか。

思考しながら門のところに書いてあったクラスへ歩く。

「困ったモンだな、スパナとかバールとかは学校に置いてるしなあ」
本当に困った、食糧も困ってなかったみたいだったし……どうしよう？

「ま、取り敢えずだ……えーと？……いたいた」

クラスに付いた後、俺が周りを見回し探してた人物は一目見るだけで芋そうなメガネの男子。

「あ、はい？なんでしょう？」

平野コータ、個人的に好きだった人物だ。

何故小室孝じゃ無いのかと言うと、まあアレだ。

単に女関係のいざこざに関わりたく無かったのが多い。

でも冴子様と鞠川先生は別よ？コータと同様に好きだからね。

まあともかくだ。

「あ、えーと……昨日君を見かけてさ、何かの縁だろうし友達にならない？」

さ、流石に無理があつたろうかコレは……。

それに昨日見たつてのもウソだしね。

しかし俺の思想とは裏腹に、コータは目を輝かせて

「え！え！僕と！？いいのっ！？」

なんて言ってきたんだ。

やべ、不憫すぎる…きっと中学でもとんでもない生活だったんだろう。

更に俺はコータが高校でも同じ運命に陥る事を知ってる。

なるべく緩和はするけど、けして助けはしない…何故ならコータにも拒否反応権はあるから。

それに、バスでの紫藤先生威嚇のフラグも折れちゃうから…。

コータには悪いが結局全部コータの為なんだ、分かってくれ。

「あ、あれ？あの？どうしたの、いきなりシミジミした顔して？」

「ん？ああゴメンちょっと考え事、それと俺は石井和樹って言うんだ、宜しくね？」

「う、うん、僕は平野コータ、宜しく！！」

うん、良い笑顔、高城ももっとコータを見るべきだ！

てかコータ頑張れ、ちょー頑張れ…小室強いからなあ、冴子様も惚れたしね。

その後先生が来たのでコートとは一旦別れ席に付く、まあコートの前の席なんだが。

先生が色々話してるが頭に入らない。

前の人生で何度も同じような事を聞いてるからだ。

そんな先生の話しを背景に俺は、破滅の運命にある物語の攻略法を考えていた。

第1話（後書き）

なんと石井君の憑依ものです！

名前の方はちよつとだけオリジナルですけど、名前言う前に死んじやいましたしね

いろいろ悩んでますが週2〜3くらいのペースで行きたいんですけど…どうでしょう

とにかく、読んでくださった方に感謝を！それと暇でしたら感想書いてくれると嬉しいです

あ、本当に暇だったらで良いので（笑）

それでわ！

第2話（前書き）

初日なんで調子乗って二日連続です。

ちよつと石井君が壊れてきました。原作キャラの口調は安定してるか微妙です。それではあまり期待しないよう、どうぞ！

第2話

「ごめんね、いつもいつも」

「いえいえ、コレが俺の仕事ですし」

勿論、鞠川先生の見事なオツパイを観察する事では無い。

俺はクラスでまた保険委員になったのだ、ついでに一年の時もやっていた。

部活には入ってなかったのだから毎日お手伝いをしていた。

まあこれも一応対策の一つなんだが…私情も入ってる、毎日鞠川先生の隣にいられるからね。

「君は部活とかやらないの？」

「ははは、部活ってなかなかキツイじゃないですか、だからあんまり…」

両手に持っていた医学系の本の位置を整え、横を歩くおっぱ…鞠川先生の顔を見る。

「そうなんだ…」

「あ、あの先生…」

「なあに？」

「俺の事…名前で呼んでくれませんか?…」

しかし何が分からなかったのか先生は首を傾げた

何故首を傾げる!?!今の話して何処に首を傾げる要素があったの?!?

名前で呼んでって言ったただけなのに…。

やはり俺(石井)は鞠川先生に名前を覚えてもらえないのか…ちくしょう。

「すいません、やっぱイイです」

「そう?何でも言っただけ?」

「……はい」

こういう風に何度か名前を教えているのだがさっぱり呼んでくれない。

まあ俺が2話で生き残れば良い事か。

そうこうしてる内に保健室に着いた。

「コレは此処で良いですか?」

「ええ、そこで良いわ、ありがとう」

「いえいえ……先生」

「ん？なあに？…よいしょっと」

先生のよいしょっと…ごちそうさまです…じゃなくて！

「あの、学校が火事とかになったらココの薬…」

「勿論持つて出るわ、怪我した人が出るだろうし」

「あるもの全部ですか？」

「う、うん…どうして？」

いや、気付かないんですか、そこがまた天然ぽくて良いんですけど。

「いやなに、コレだけあれば持ち運ぶのも一苦労だなあ、と思いまして」

「あ……」

「まあそんな事だろうとおもいまして、こんなん持つて来ました」

「わあっ！すごーいつ、どうしたのコレ？」

俺が持つて来たものはもう使わなくなったりユックサック。

そこまで凄くないと思う、喜んでくれたから良いけど。

恐らくコレからの地獄で使うだろう物だ、背中に背負えば持ち運ぶのも簡単だ。

「ウチにあつたもんで、良ければ使ってください」

「うわーっ、ありがとっ！！」

綺麗な笑顔に思わず顔が暑くなり手で扇ぐ。

これが、俗に言うニコポか……やりますね……あれ？普通反対じゃないか？俺がニコポされただっ！？

「石丸君っ！大切にするわっ！」

せんせえっ！？それ以上ニコッてしないでえっ！？溶けるっ！それと名前間違ってますっ！

そんなこんなで次の日、授業が始まるって言うのに俺は屋上へ向かう。

目的は、小室だ。

「や、小室」

「またお前か、石井」

そう、最近俺も小室と授業をサボっている。

理由はある、「奴ら」が来た時に1番始めに気付いたのは屋上にいた我らが主人公、小室。

先手を打つ為にはココにいるしかない、時期も桜が咲いてた時って

ぐらいしか分からないからね

そして…屋上から見下ろすと見えるのは満開の桜…

高校二年、16歳…俺がなんとかするしかない

「石井？おい！」

「んあ？ああ、なんだ？」

「つたく、時々お前そんなやって考え込むよな、なに考えてんだよ」

「鞠川先生のおっぱい………何でもない」

「何でも無いよなっ！？最後まで言った後に、何でもない、と
か言われても」

「いや違うんだ、本当は毒島先輩のおし………るこ」

「誤魔化しが最低レベルだ、お前は変態って事だけが分かったよ」

いつの間にか小室の中での俺の位置付けがおかしくなってるのは解
せないね。

「なあ小室、非日常とか信じるか」

「何だよ突然」

俺は屋上からある一点を見つめながら小室に問う。

「俺は…信じたく無いね、魔法とか剣とか怖いし」

「まあな、本当にあつたら僕も怖いよ」

「でも、それが…非日常が目の前で起こつたら…信じるしかないじゃないか」

「石井？また訳分らない事……あ、何だあれ？不審者か？」

小室も気付いたらしい、俺は背を向け屋上の扉に歩を進める。

「おい、石井！あ、あれ！な…何だつてんだ一体っ！！」

眼下に見えるは日常にあつてはならない光景。

人が人を喰っている、非日常が目の前に迫っていた。

「小室、逃げよう…マズイ気がする」

「あ、ああ、麗と永を……」

「俺は正門に向かう、またな」

「お、おい石井っ！？」

小室の声を無視し俺は正門へ急いだ、ポケットの中の重さを確認しながら。

第2話（後書き）

一応携帯でも書いてるので誤字多かったです、すみません。
読んでくださった方に感謝を！それでわ！

第3話（前書き）

戦闘が入ったせいか文がいつもよりおかしいと思います。
戦闘書くの難しいですね…頑張ります
それでは今回も期待せずに、どうぞ！

第3話

「畜生っ!!」

目元の返り血を拭い、思わず叫ぶ。

やってしまった、甘かった。

何が原作ブレイクだ、全然駄目じゃないか。

よく考えれば分かる事だったのに、しくじった…

…終わった事は悔んでも仕方ない、こうなったら原作キャラだけでも助けよう。

「……今一番危ういのは、鞠川先生だよな」

何故なら俺が、石井が近くにいないからだ。

原作では石井が犠牲になり、鞠川先生は生き残った。
でも今俺は、保健室にいない…

「間に合えよっ!」

悔しさに齒軋りしながら保健室へ向かった。

〈30分程前〉

「奴ら」の所へ向かう途中、自分のロッカーに寄る。

ロッカーの中から調達していた鉄パイプ等を取り出し正門へ急ぐ。

正門前に着くとそこでは地獄の様な光景が繰り広げられていた。

「いやあああつ！？た、だずげつ！？」

「ぎゃあああああつ！！」

余りの叫びに、少し遅かったか？と周りを見渡して見るとまだ三匹程度。

後は幾人かの先生が取り乱しているだけだった。

今「奴ら」を叩けば生存者も増えるかもしれない、いや増える。

俺がやるしかない俺がやるしかない俺がやるしかない俺がやるしかない。

そんな思いとは裏腹に足が動かない。

不思議に思い、足元を見ると震えていた。

ただ震えるだけ、間近に見た「奴ら」に身体が恐怖する。

心が怖くなくても身体が怖がる。

「あ、ああ……」

息が荒れる、喉が乾く、手元が定まらない、歯が噛み合わない、視界がブレる。

思わず膝を付く。

ハッ、ハッ、と荒い息を吐きながらも前を向くと、すぐ近くに尻餅をついた先生とそれに迫る「奴ら」が。

「や、やめてくれえっ!」

意味の無い叫びをあげる先生の首筋を「奴ら」が喰らう。

びしゃっ!と何かが顔に飛んで来たみたいだ。

それを手に取り、ゆっくりと視線を移す。

もう何処の部分か分からない肉片が手の平に収まっていた。

ソレを確認した瞬間動かなかった筈の足で恐怖に泣き叫びながら俺は走っていた。

「うわあああああつ!あああつ!おあああああああつ!」

先生の死体を夢中で喰らってる一体目の脳天に鉄パイプを振り下ろす。

「づあああああつ!」

分かっていたのに、「奴ら」は音に寄って来るって知ってたのに、

それでも叫ぶのは止められなかった。

止めたらその瞬間に身体が動かなくなりそうだったから。

少し冷静になり状況を確認すると、また少し増えている事に気付く。

「く…多い…」

残りは五匹、まだ学校では授業をしてるんだぞっ！？それなのにつ！

「っ！そ、そうだ、おおいっ！俺はコツチだああっ！！」

こうやって大声を出し引き寄せる、コレで校舎にはまだ入らない筈。

案の定、残り物全ての「奴ら」がコチラを向き、すかさず近くの木に石を投げて音を出す。

「よし、よーし…そのままだ」

五匹ともその木の方に寄って行くのを確認し後ろから近付いて鉄パイプを構える。

「お前等が、お前等が死んだら全部終わるんだよ…死ねえええっ！！」

ありったけを込め、順番に鉄パイプを打ち下ろしていったが…

「しまっ！？」

慣れない事をしたせいか五匹目は肩に打ち下ろしてしまった。

お、落ち着け…大丈夫、イメージ通りにやるんだ。

俺には冴子様みたいな剣の腕は無い、宮本みたいな槍の腕も無い。

コートみたいに銃は扱えない、鞠川先生みたいに薬に詳しくも無い。

高城みたいに頭も良くない、小室みたいにリーダーの資格も無い。

「けどさあ、思い切りの良さだけは負けたくないっ…！」

鉄パイプを両手で握りしめ、正面から走る。

そして、五匹目が飛び掛かってきた瞬間に横に転がるっ！

「痛たた、膝擦りむいた…」

膝を摩りつつ横を向くと体制を崩した五匹目が。

「よし、コレで終わりだ…」

メガネを中指でクイツと上げ、走る！

「めええええんっ…！」

ドゴォツと鈍い音が響き五匹目が動かなくなる、倒した…？

「やった、やったぞ…コレで、学校はひとまず安し…」

しかし無情にも鳴ったのは学校の放送、閉じた筈の地獄への道。

「全校生徒・職員に連絡します！全校生徒・職員に連絡します！
現在、校内で暴力事件が発生中です、生徒は職員の誘導に従って直
ちに避難してください！！」

……あ、え…は？

疲れた身体に響く様に聞こえる放送。

「ま、待てよ…暴力事件？馬鹿な、俺が全部殺し…」

「繰り返します、現在校内で暴力事件が発生中で…」

そこまですべてだった放送が突然切れ、そしてガキンという嫌な音と
共に再び放送は鳴り始めた。

「ギャアアアアアッ、あつ、助けてくれっ止めてくれっ、ひい
いいいっ」

あ、そうだった…そうじゃないか、こんな放送があるって事は放送
室で今襲われてるんだ。

仮に正門にいた「奴ら」が生きていたとしてもこんなに早く校内に
入れる筈が無い。

つまり、俺が闘っていた時にはもう何匹か校舎内に入っていたんだ。
そうじゃないにしろ裏門やら何処から入ったのだろう、まあどう
にしろ…

「骨折り損のくたびれ儲け、か…くそ」

思わず顔を顰める間にも狂気の校内放送は続く。

「たすけっ、ひいつ、痛い痛い痛い痛い！！
助けてっ死ぬっ、ぐわあああ！！」

校舎内から凄惨な音が聞こえる、多分今の放送を聞いた生徒が我先にと逃げてるのだろう。

「逃げ場なんて、何処に…」

俺が上手くやってれば、少しは変わったんじゃないか…

もしかしたら、この地獄の物語も語られる事なく終わったんじゃないのか。

自分の無力を噛み締め、俺は吠える事しか出来なかった。

「畜生っ！」

第3話（後書き）

実はこのままの更新ペースを維持するのが難しくなってきました。何故かと言いますと、そろそろテスト期間に入っちゃうんです、すみません。なんとか予約掲載などしてみますが、更新が遅れるかもです、ご了承ください。

それでわ読んでくださった方に感謝しつつ、また次回！

第4話（前書き）

さて、ちょっと思ったんですけど、学園黙示録ってまだ完結してないんですね。

もし追いついたらどうしようかなって思ってます。

まだまだ先ですけど今のうちに考えとこうかなと思いました。

やっぱりオリジナル展開になるんですかね、あんまり好きじゃないんですが…

まあとにかく、今回も楽しんでくださったら嬉しいです！どうぞ！

第4話

「鞠川先生っ！！」

ドアもぶち破らんばかりに保健室に入り込む。

もし、もう鞠川先生が「奴ら」に喰われてたら…祈る思いで保健室を見渡す。

「あ、井川君丁度良い所に、実は人手が足りなくて」

いつもの様な、のほほんとした声が耳に届く。

「よ、良かったあ」

「はえ？」

ホッとした、心の底から安心した。

でも、すぐに此処から逃げないとか貴方まだ治療やってたんですかとかはえ？じゃないでしょうとか名前間違ってます！とか。

色々言いたい事があって思考がうまく纏まらない。

「あ、う、えーと…」

「？」

ああ、鞠川先生を困らせてる、なんか出てこい、なんか言えよ俺！！

「あー…さ、桜…」

「桜？」

桜って何だよっ！！

「き、綺麗ですよー桜」

…ああ、更に状況が悪くなった。

会話ってやっぱり言葉のキャッチボール、無意識にやるモンじゃないね。

そして俺は、今話してる相手がどれだけ天然かを忘れていた。

「うん、綺麗よねー桜」

駄目だこの先生、頼りにならない…

「…綺麗ですけどもっ！！その前に逃げましょっつ！」「奴ら」が来ますっ！」

「え！？桜の話振ってきたの石野君だったよね！？」

「それは悪かったですけど、後俺は石井です。」

「あ、ごめんね」

「まあ良いですけど、持っていく薬全部バックに詰めて下さい、此処

から逃げます」

「でもどうやって？外はアンデットだらけよ？」

「職員室ですよ、車の鍵を取りに行きましょう、話はそれからです」

「あー、車で逃げるのねー」

「良いから早くっ！」

「うん！」

鞠川先生が準備してる間、俺は勿論周囲を警戒していた。

ここだ、ここなんだ。

学園黙示録でどうなのかは知らないが、俺にとっての1番大事な所。

ここを乗り切れるかで全てが変わる。

その時、扉を叩く音が聞こえた。

「え、な、何！？」

「……鞠川先生」

「は、はい？」

「隅に寄ってて下さい、来ますよ」

「え、来るって…」

別に鞠川先生が隅に行く必要は本当は無い。

少なくとも俺がここにいる時点で鞠川先生は死なないからだ、でも一応移動してもらおう。

2人とも生きるか、原作通りに俺が死んで鞠川先生が生きるか。

「時間を稼ぐだけで良い、焦らず対処すれば生き残れる」

そう時間を稼ぐだけで良い、時間が経てば増援が来る。

登場人物で恐らく最強であろうあの人が。

いきなり保健室の扉が破れ何匹かの「奴ら」が入ってくる。

「取り敢えずは、これだ！」

「石蔵君、それってお猿さん？」

そう、生き残りアイテム、シンバル猿さん！この際名前間違ってるのはツツコまない…

素早く電源を入れて、コチラとは反対の場所に向かわせる。

あーうー言ってる「奴ら」の中をシンバル叩きながら歩く猿のオモチャ。

すごいシニールだ。

「うし、これで注意はシンバル猿に向いた、後は…」

さつきしたみたいに後ろから殴るのみ。

おおつといけない、また叫ぶ所だった…今度は声を出さず静かに、されど鋭く脳天に鉄パイプを下ろす。

「寺井君！」

多分俺に向けた心配やら応援やらの声だったのだろう、名前全然違うけど。

しかし今ので「奴ら」の注意が鞠川先生に向いた。

しまった、こんな事なら「奴ら」は音に集まるって言うておくんだっ…

「鞠川先生っ！」

少しでも「奴ら」が俺に来る様に叫びながら駆け寄る。

「え、何？」

「「奴ら」、音に集まるんですよ…ちくしょう…」

鞠川先生を背に、牽制するように鉄パイプを振るう。

でも…シンバル猿作戦が失敗した今、出来る事は余りに少なかった。

「奴ら」が近くに来る度に鉄パイプを振る、もう頭なんて狙ってられなかった。

それに体力も持たない。

「まだなのか…まだ来ないのか」

不安と焦りが急速に増す。

そんな雑念の中で闘っていたせいか、それとも今までの疲労のせいか、持っていた鉄パイプがすっぽ抜ける。

「あ、うあ…」

「ちよつ、ちよつとちよつと…」

やっぱり駄目だったか、でも結構頑張った方だよな、鞠川先生すいません。

そんな思いで目を閉じる、疲れてしまった。

もういいや寝よう、誰か子守唄歌ってくれよ。

そして俺の願いとは逆に音が鳴った、ガッ！ゴッガッ！と何か殴る様な音が。

「え？」

思わず目を開ける。

もしかして、もしかすると…

「大丈夫だったか？鞠川先生…と2年生、君は？」

「冴子様……」

「は？」

もう俺は冴子様しか見えない、冴子様ばんざーい冴子様ばんざーい。
やった、勝った…死ななかった、俺は、石井は…今まさに運命に勝った。

つてそろそろ自己紹介しよう、毒島先輩の俺を見る目が怖い…

「…あ、ああすみません…少し気が動転しました」

「いや良いんだ、この状況では仕方無いだろう、私は剣道部主将毒島冴子だ、君の名前は？」

「はい、えーと…」

ああ、緊張する…これを言いたかった、ここから始まるんだ。

やってやる、こんな地獄打ち勝ってやる。

俺は運命にさえ勝ったんだ、こんな地獄…屁でもない。

「俺は石井です、石井和樹です！」

第4話（後書き）

キャラの喋りはおかしくなかったでしょうが、間違ってたらすみません暇だったら言ってください、宜しくおねがいします。

それでは、今回も読んでくださった方皆さんに感謝を！ありがとうございます！

第5話（前書き）

どうも、やっとそれっぽくなってきました。
今回少し長いですが、ご注意ください。
皆さんが楽しめたらうれしいです、どうぞ！

第5話

けっして走ったりしない、少しでも音が出ない様に。

早歩きで、かつ素早く。

寄って来る「奴ら」は毒島先輩が払ってくれる、鞠川先生おるか俺すら出番は無い。

ヘタレですいません、でも毒島先輩に勝てる気はしないよ、精々足でまといだな。

毒島先輩が「奴ら」に対処してるのを見て疑問に思ったか、鞠川先生が

「どうしてやつつけないの？毒島さんなら簡単なのに」と聞いた。

あれ？何でだっけ？忘れちゃった。

「出くわすたびに頭を潰すのは足止めされてるのと同じだ、取り囲まれてしまう」

なるほど、そう言われたらそうだな

「それに、腕力は恐ろしい程に強い！つかまれたら逃げるのは難しい」

「はー、すごいね……」

「ほー、すごいな……」

「石井君、君もか」

「…すいません」

く、天然鞠川先生と同じ事を言うとは、解せぬ…

「なんか石井君が失礼な事考えてる気がするー」

「あはは、気のせいですよ気のせい……名前やつと覚えてもらえましたが」

「んー毒島さんがさっき言ったからかも……ひゃんっ」

話に夢中になってたからだろう、鞠川先生が思いつ切り前のめりに倒れた。

「なんなのよもー！」

「先生が転んだんですよ、しっかりしてください」

起き上がらせるために手を差し出そうとしたら毒島先輩に止められた。

なんだろう？と思って見ると毒島先輩はそのまま鞠川先生の傍に行き屈んだ。

「走るには向かないファッションだから転ぶんだ」

そんな言葉のあとにスカートをビリビリと足の付け根位まで破き始

めてしまった。

あーあ、もったいない、毒島先輩は本当に女の子なのか？

……寒気がしたのでこんな馬鹿な考え止める事にする。

案の定鞠川先生が悲痛の叫びを上げる。

「あー！これプラダなのにー！」

プラダって何？聞いた事ないなあ。

「ブランドと命と……どちらが大切なのだ？」

「……両方ー！」

コレには思わず笑ってしまった。

そう言えばそんな話もしていた様な、やはりここら辺から原作知識が曖昧だな。

「なによー！」

「ははっ、いやなに、鞠川先生らしいなあとね？」

「う、うー…毒島さあーん、石井君が苛めるう」

やばいこの人味方増やす気だ、毒島先輩を敵に回したら勝ち目無いぞ！？

そんな俺の心配はいらず、毒島先輩は何やら別の事が気にかかっているみたいだ。

「どうか、しました？」

「…音が聞こえる、職員室からだ」

「音？「奴ら」が立ててる音では？」

「いや、恐らくこれは人工的な音だろう、規則正しい」

俺にはよく分からないけど…

「どちらにせよ、職員室に行くしかないな、急ごう」

慌てて鞠川先生を起き上がらせ、毒島先輩の後を追う。

（職員室前）

叫び声が聞こえる。

「死ね死ね死ね死ねえええ！！」

1人の女の子が人の額をドリルで貫いている。

アレは高城だろう、銃らしきを持つてるのはコータか。

もちろん昨日まではあり得ない事だ、でも状況が変わるだけでこう

なる。

普通の日常がどれだけ脆いのか、知った気がした。

「鞠川先生、石井？」

同じ様に向こうから駆け寄って来た2人には見覚えがあった。

「小室、宮本……」

これで主人公メンバー + α が揃った、 α は言うまでもなく俺である。

俺の言葉を聞いたからか、毒島先輩が小室達に支持を飛ばす。

「私は右の2匹をやる!!」

「左を押さえるわ!!」

2人が華麗に「奴ら」をさばく。

……出ていけなかった俺をチキンと言わないで欲しい、本当に対応出来なかった。

小室もそうだろうと思い、最近の女の子って強いよなーと話に行こうとした、が。

「なんで……あいつも行ってるのさ？」

ちやっかり小室もバットで殴りに行っていた。

なるほどね、流石主人公、小さい事からコツコツと。

正直、主人公ってそれだけで女の子寄って来るのかなあって思ってたけど違うんだね。

日々の努力、小さなアピールでハーレムが出来る訳だ。

「わたしは毒島冴子、3年A組だ」

おおっ、変な事考えてる間に自己紹介が始まってた、一応俺もやっておこう。

「小室孝、2年B組」

「素っ気ないなあ小室、B組石井和樹です」

「お前もそう変わらないだろう?…まあ無事で良かった」

「ツンデレめ」

「なんだって?」

いつもの2人の話をしようとした所で宮本が割って入る。

「はいはい、そんなのは後にして…槍術部の宮本麗です」

「あ、えと、び、B組の平野こ、コートです」

「そんな緊張しなくても良いよ、リラックスコート」

「あ、うん、それと石井なら大丈夫だと思ってたよ」

「ありがとう」

「皆よろしく」

ここで毒島スマイル、コータがヤケにデレデレしてるのが気になる。

お前、高城だろう？そんなんだから駄目なんだよ。

「なにさ…みんなデレデレして…」

あ…何やら高城が変な空気を出している。

これは…マズいのかな…

不安に思っ、何か言おうとしたら服の袖を摘まれた。

なんだ？と振り返ると鞠川先生が何か言いたそうにしている。

「……私、空気…」

……ああ

もう一度高城の方を振り返るとどうやら毒島先輩が対処してくれてる様だった。

さて、こっちか…

うー、と唸りながらこちらを見上げている先生を見る。

見上げるって貴方の方が身長高いでしょうが、それに…

「今日はずっと唸ってないですか？先生」

「だ、だって、だって…」「奴ら」は出て来るしスカート破られるし皆に無視されるしー！」

「ああはいはい、今度からさりげなくフォロー入れますから、それで良いですか？」

「…うー……………うん」

はあー、疲れた。

取り合えず頷いてくれたし、今回はこれで良いけど鞠川先生のキラ位置って空気になりやすいんだよねあ。

ま、今は気にする事じゃないけど。

どうやら向こうも解決したらしい。

何があったか知らないけど高城が毒島先輩の胸で泣いてる。

さてと、それじゃあ先に車の鍵でも探しに行くかな。

俺は、まだ何処か不満そうな鞠川先生の手を引きながら職員室に入った。

第5話（後書き）

なかなか進まなかったです。

漫画とかアニメだとそうでもないのに文にすると長いですねー。

それでわ、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございます！
しました！

第6話（前書き）

こんにばんわ。

この間久しぶりにアクセス解析してみたらPVが1万超えてました。
ユニークも思ったより多く、読んでくれた皆さんに感謝の思いです！
これからも頑張っていきます！でわ、どうぞ！

第6話

もう泣き止んだのか高城達も職員室に入ってきた。

「石井君、鍵はあったか？」

「それがですね…」

結果を言えばあった、のだが…

「小さかったんですよ…車」

「小さい？」

そう、小さかった。

とても7人が乗れる様な物では無かった。

「なるほど…」

「どうします？歩きとか論外ですし、タクシーでも呼びますか？」

「冗談、タクシー呼んでも来る途中でどうせ「奴ら」の仲間入りだよ」

「コータは歩きたく無いんじゃないの？」

「…石井ってさ、ときどき僕の事馬鹿にしてるよね」

「あはは、ごめんごめん」

たわい無い会話の中、突然毒島先輩が思い付いた。

「部活遠征用のマイクロバスはどうだ？壁のカギ掛けにキイがあるが」

あー…その手があったか。

というかその話は聞いた事ある、そのバスでココを抜けるんだっけ…

「バスは良いけど、どこへ？」

確かに、鞠川先生の疑問もモットモだ。

安全な場所を知ってるならまだしも考え無しに移動してもジリ貧じゃないか？

「家族の無事を確かめます」

流石主人公、自分の事より周りの事ってね。

まあ俺も無事かどうか確かめたいけど…ついでに、俺にもちゃんと親はいる。

「近い順にみんなの家を回るとかして必要なら家族も助けて、その後は安全な場所を探して」

あるのか？安全な場所、探してって事はアテ無しか。

「見つかるはずよ」

そうですか。

「警察や自衛隊だって動いてるはずだから地震の時みたいに避難所とかが……どうしたの？」

高城が話してる途中に、宮本がテレビに釘付けになってるのに気付いたみたいだ。

「なんなのよこれ……」

「麗、どうした……！」

テレビの内容を纏めると、政府はこの事態をなるべく慎重に考えてるらしい、つまり公に発表したくないって事、「奴ら」の事を暴動って言ってたしね。

なんでも混乱、パニックを恐れてるだとか、高城が秀才そうに皆に説明してくれた。

さっきまで泣いてたくせに。

そしてコレが1番驚いたが、日本だけで無く海外まで広がってるらしい。

ホワイトハウスは放棄、モスクワなんか通信途絶。

コレすごい無理ゲーだな、どうしろって？

ニュースを聞いたせいか宮本が半泣きに。

「ぜ、絶対大丈夫な場所あるわよね？きつとすぐいつも通りに……」

なる訳あるか、というか宮本も本当は分かっているんじゃないか？

「なるワケないし…パンデミックなのよ？仕方ないじゃない」

そつだそつだ……宮本、パンデミックって何？

「感染爆発の事よ！世界中で同じ病気が大流行してるって事」

ああなるほど。

つまりインフルエンザとかの事だろう、それにしていつまで高城は秀才モードなんだ？

さっきまで泣いてたくせに。

ついでに鞠川先生が出した、「奴ら」暑さで腐るんじゃないか、という説は秀才モード高城に無残に打ち破られた。

「とにかく、皆が勝手に動いてちや危ないな」

「石井君の言う通り、チームだチームを組むのだ、生き残りも拾っていい」

拾っていいこうって、別の言い方は無かったですか？

とにかく一行は小室を先頭に、駐車場へ向かう事になった。

俺は殆ど戦わずして着いて行く、途中にモブキャラと遭遇したがこいつ等は多分死亡要員だろう。

救ってやりたいが、無理して俺が死んだら元も子もないからな。

結局玄関まで着いたけど、さて。

「玄関にこんなにいるとはね、匂いが強いから？」

靴の匂いは関係無いと思うが至る所に「奴ら」がいる。

「「奴ら」、目は見えないんでしょう？誰かが罔になれば良いんじゃないか？」

我ながらナイスアイディア。

「ほう、じゃあ君がやってくれるか？」

「無理ですすいません」

オニだ、毒島先輩鬼だ。

…そして全員で沈黙。

まあ、どうせ…

「僕がいくよ」

小室が行くだろうし。

小室はその後になにやらカッコ良い事を行って「奴ら」の元に。

あんな「奴ら」の真っ只中にいんのに、たいした奴だな。

小室はその後、機転を効かせ、シューズを遠くに投げて「奴ら」を遠くに向かわせた。

いいぞこむろー。

そして皆で逃げて万々歳になる筈だったんだ。

だったんだが、ベタというか何というか…最後の1人が音を立ててしまった。

それも校庭にまで聞こえる様な音を響かせて。

「走れっ!!」

小室の声に全員が弾ける様に駆ける。

高城がなんか言ってるけど聞ける暇もない。

「卓造！」

あ、モブの1人が捕まった、しかもちよつと遠い…すまん無理だ。

しかも叫んだ女の子は高城の制止も聞かずにもう噛まれてしまった卓造の元へ戻ってしまった。

「ちゃんと教えてあげたのに！どうして戻るのよ！！信じられない！！」

全く同意見だ、訳が分からない。

「私分かるわ」

そんな言葉を発したのは鞠川先生だった。

ちょっとビックリした、でも次の言葉を聞いて…ビックリし過ぎて気分が悪くなった、高城も宮本も凄い顔してる。

「もし世界中がこんなになってしまったのなら…死んでしまった方が楽なもの」

……何でだろう…酷く気分が悪くなった。

前を走る鞠川先生の顔は…見えない。

第6話（後書き）

どうでしたか？誰が喋ってるか分かりづらいですけど…難しいです。それでは、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第7話（前書き）

こんばんは、今回いつもより長いですが、注意してください。
それと、なかなか進まなくてちょっと飛ばし気味です、読みづらか
つたらすみません。
皆さんが楽しめると嬉しいです、どうぞ！

第7話

「もう出せるわよ!!」

さっきまでの妙な雰囲気は無かったかの様に鞠川先生が叫んでいる。出せる、とはバスの事、乗り込めたのは乗り込めたんだが残ったのは結局最初の七人のみ。

途中合流した生き残りを助けられなかった事や鞠川先生の暗い言葉で軽く凹んでいたのだが……いつもの鞠川先生に戻ってくれて良かった。

「もう少し待ってください!」

何故まだ出られないかと言うと、紫藤先生と他数名の生徒が助けを求めてるからだ。

勿論小室は見過ごさないだろう、バスに寄せようとする筈。

しかし宮本は意見が違う様で…死ねば良いとまで言っている。

どうも宮本の留年関係でなんかあったみたい。

「ま、俺には関係無いか…コータ!」

「ん?どうかした?紫藤先生達の援護射撃してるから後に…」

「ああそっちはもう良いと思う、それよりバスの前の方の「奴ら」、

撃てる？」

「んー難しいけど…前の席の窓から乗り出せば何とか…なんで？」

と、ここで鞠川先生が変わりに答えてくれる。

「この車でも何人も踏んだら横転するわ」

「てな訳だ、よろしく」

「分かった、出来るだけやってみる」

まあ実際難しいだろうな、バスの前を撃つ方法なんて運転席の窓を外す位しか無いだろうし。

でも、なるだけやってもらおう、死ぬ確率は出来るだけ減らす。

「皆さん急いで！絶対助かりますよ！」

紫藤先生の声が聞こえる、どうだろう？助かるかは五分じゃないか？

助けに行きたいけど、俺じゃなんも出来ないし。

ん？あ、1人脱落してる…

その1人に「奴ら」が群がったためか紫藤先生達はバスに何とか辿り着いた。

「お疲れ様です、紫藤先生」

「ありがとうございます、ええと？」

「B組石井です、水も無くてすいません」

「いえいえ、助けていただいただけでもありがたい……このリーダーは毒島さんですか？」

ん？リーダー？

「そんな者はいない、逃げる為に協力しあっただけだ」

まあそうだろうね、リーダーか…小室がそれっぽいけど決まった訳でも無いから。

「もう人間じゃない……もう人間じゃない！」

皆がリーダーだの紫藤先生を助けた事を後悔だの言ってる時にそれは聞こえた。

聞いてたのは多分、俺と毒島先輩と高城位だろう。

ん…まだ……フォローは良いか、鞠川先生何だかんだいつでもメンタル弱くないだろうしね。

「校門を抜けます!!」

その声とともに俺達は外の世界へと抜けたのだった。

（30分程度経過）

「だいたいよお!!」

うるさ…こいついつまで喋ってんだろっ、そして何が言いたいんだ？
なにより鞠川先生困ってるじゃないか！怒るぞ!!

あ、ついでに俺の席は運転席の後ろ、つまり鞠川先生の直ぐ後ろだ。
暇だった物で毒島先輩の木刀を磨かせてもらっている。

「寮とか学校の中で安全なところを探せばよかったんじゃないのか
!？」

だあぁもう、じゃあ戻れば良いだろう、なんでバス乗ったんだ？
って言葉では言えない。

「無駄な争い大嫌い、石井和樹です」

「何言ってるんのあんた」

後ろの高城にツッコまれた…

その時、外でヘリコプターの音が聞こえた。

あ、あれでたすけてもらえるかも。

そんな一縷の望みをもって、ヘリコプターを見ると…「奴ら」なの
か分からないが何人かの生徒がヘリコプターから振り落とされてい

た、ダメだアレは。

鞠川先生と宮本が顔を背けた…ああ、このままじゃ鞠川先生事故るかもな、フォロー時かも。

そう思つて席を立とうとするとバスが道の脇に止まった。

「もう良い加減にしてよ！こんなんじゃ運転なんか出来ない！」

…やっぱり鞠川先生強いなあ、俺の出番無いじゃないか。

鞠川先生の言葉で怒りの矛先を迷ったのか、今度は小室に突っかかっている。

「んだよおつ、何見てんだやろうつてか！」

や　　ら　　な　　い　　か？

てか何で小室に？こいつもう訳が分からない。

どうやら小室が気に食わないみたいだ、理由は分からない。

あ、宮本が席を立とうとしてるんだが…止める事も無いな。

「なん……………がつ！あッ！」

案の定モップの餌食に…………モップの餌食つて変なユーモアを感じる。

「……………最低」

お前もな、って言っても間違いないだろう。

「素晴らしいチームワークでしたね、小室君、宮本さん！」

拍手とともに出てきたのは紫藤先生、何で今出てきたんだろう？ 煽りにしか見えないんだけど。

「しかし、こんな争いごとが起こるのは纏まっていけない証拠…我々には、リーダーが必要なのですよ」

凄いこの人リーダーを押すなあ、それとどういう意味だ？

「どうです皆さん、私がリーダーなら……問題が起きないように手を打てますよ？」

…ああ、なるほどね。

つまりだ、自分がリーダーになりたかったと、そういう事かあ。

はあ、俺紫藤先生悪い人じゃ無いと思ってたんだけどなあ、少し残念…これは凄い悪役オーラだ。

しかも多数決で勝手にリーダーになってしまった、俺一応まだ信じてますよ？ 精々変な事しないでください。

そんな中、誰よりも早く宮本が動いた。

「先生開けて……開けてください！ 私降りる！ 降ります！」

そんな必死にならなくても…まあ流石に危ないよな。

「先生駄目です、開けないでください、外は危険です」

「え？えと、あの…」

俺の意見と宮本の意見とで挟まれて鞠川先生が可哀想だけど仕方ない。

「~~~~~ッ!!」

俺の発言と鞠川先生の困惑にイラついたのか自分でドアを開けて逃げる様に外に出る。

あ、小室も後を追い、そとに出た…流石主人公と言っておく。

「そんな奴と行きたく無い！」

「街までだ！街まで我慢するだけじゃないか！」

まあそうだが、宮本には耐えられないんだろう。

つて…あれは……まずっ!？

「小室っ！横っ!！」

宮本が話してる途中に物凄い音とともにバスが爆走し、吹っ飛んできた。

「きゃっ」

更に、オイル漏れか何かで車体が爆発し、完全に小室達と切り離されてしまった様だ。

「小室君っ！大事ないか！」

「警察で、東署で落ち合いましょう！」

怪我がないみたいで良かった。

しかしあいつ等と離れてしまった、小室は大丈夫だろうけど宮本死
ないよな？

すこし不安だが、戻って来てくれる事を信じよう。

「鞠川先生！別の道から行きましょう！ここはもう通れない様です
！」

「分かったわ！」

こうして、俺等は上手く小室達と切り離されてしまった。

何も無ければいいけど……

第7話（後書き）

やっぱり進まない… やつと1巻分ですかね？長いです。

それでは、読んでくださった方皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第8話（前書き）

こんばんにちわ、友人と話したことなんですけど、石井君の一人称に違和感を覚えた方もいると思います。

最初は「僕」だったのですが、それでは小室やコータと被るな…と思い、一人称は「俺」になりました、違和感を感じた方、すみませんでした。

それと今回どつかの右手凄い人程ではないですが、説教入るかもです、微妙です。

それでは、皆さんが楽しめたらうれしいです、どうぞ！

第8話

あーあ…どうなってんだろうコレ。

「………ですから！宮本さんや小室君は皆さんの仲間に相応しく無かったのです！！」

車内は紫藤先生の熱演で盛り上がってる様にも見えるだろう、だが実際は綺麗に紫藤組と俺たちとで半分に別れている。

「まあ言わずもがな、俺達の中で紫藤先生の事好きな奴はいないと…はあ」

そんな俺のため息をどう取ったのか毒島先輩が

「石井君は紫藤先生の事を良く知らなかった様だったからな」
なんて言ってくる。

刺さります、グサグサ来ます先輩……無知ですみません

紫藤先生が生徒を励ましてるのを見てから、この人は自分だって怖いだろうに凄いなあって思ったけど。

チラリと横を見るとまだ何やら良く分からない事を言ってる、紫藤先生の前に祭壇が見えるよ。

アレは救えない、正直説得なんて意味無いだろう、高城に紫藤教なんて言われても仕方が無い。

「あいつは生き延びるのに周りを見ない、自分の気に入らない物を

平気で蹴落したり、ね」

「追い出しましょうか？」

「コータ、それは無いよ」

コータが釘打ち機を構えたのは流石に止める、こんな子に育てた覚えはないのに。

「僕も育てられた覚えはないからね」

コータが冷たい…

「まあこのままって事は無いでしょう？」

それは賛成だ、でも結局歩きか？危ない気がする…ウダウダ言っ
られないのは分かるが怖いもんは怖い。

「バスを捨てて逃げるか、紫藤先生もあるが…何より道がアレでは
な」

今俺達の目の前には大橋がある、いつもは普通の橋なんだが今は前
代未聞の通行止めになっているそうだ。

通れるのは城の向こうにある御別橋のみ。

「それで良いわ、あたしの家も小室達と同じで御別橋の向こうだし
？」

「僕も賛成です、両親は近所にいないんで」

その後、すこしコータの家族で盛り上がったが俺はもう知ってたので聞く役に回っていた。

…鞠川先生はどうだろう？

「で、どうするの？私も一緒に行きたいから」

「いいの？」

俺も聞こうと思ったよ。

「私はもう両親いないし親戚も遠くだし、こんなこと言っちゃいけないんだけど……」

なんだろう？

「紫藤先生あんまり好きじゃないの」

まあそうだよな、皆もコレには笑ってるし。

「それじゃあ、俺も降りますよ」

「石井君、お家は？」

「心配無用、御別橋の向こうです」

何となく高城のマネをしたくなって眼鏡を中指で押し上げる、うん、決まった。

「それじゃ、早速行動ね」

「と、その前に…石井君、私に言う事は無いか？」

え？何だろう…特に無いと思うが…愛の告白？いやいや無い無い。

「えーと……？」

「ふふ、変なトコで呆けているのだな君は…良い加減木刀を返してくれ」

「ああ！すみません、すっかり忘れてました」

まだ俺の手の中に収まっていた木刀を見ると、ワックスでもかけたかの様にピカピカになっていた。

それと反対に俺の手は「奴ら」の血でべとべとだけど。

「いやありがとう、手は何処かで洗わないとな」

「ですね…まあその前に」

「ああ」

そして丁度いいところで、好き勝手に話していた俺達に紫藤先生が話を振ってくれた。

「どうしたのですか皆さん？ここは一致協力して……」

「ご遠慮するわ紫藤先生、あたしたちはあたしたちの目的があるの

「!!」

紫藤先生の言葉に素早く振り向きながら高城が言い放った、カッコイイんだけど。

「ほう……貴方達がそう決めたのならどうぞご自由に、なにしろ日本は自由の国ですからね!!」

その指と指を合わせてるポーズ、カッコ悪いです先生。

「しかし…貴方は困りますね鞠川先生！現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます」

びくんつ、と鞠川先生が反応する。

今まさに鞠川先生の意志を失ってるじゃないか、医師だけに。

上手かった、座布団三昧だ。

まあそれは良い、つまり残れって？鞠川先生にココに残れって？

んな馬鹿な、ほら先生のせいで鞠川先生怯えてるじゃないか。

鞠川先生の肩に手を置き「大丈夫ですよ」と呟いた後、あいつを一発殴ろうと足を前に出……すのは止めた。

隣でコートを凄い顔をしてたからだ、これは怒ってるな、巻き添え食らいたくない。

俺が皆と少し後ろに下がった直後に平野が紫藤先生に釘を放った。

釘は紫藤先生の頬を裂き、席に刺さる。

「ひ、平野君……？」

「外したわけじゃない、たまたま外れたんだ」

つまり一発目から殺すつもりだったと？それは駄目だろコータ。

「き、君はそんな乱暴な生徒では……」

「俺が何人やつつけたと思ってるんです？だいたいお前は俺の事を馬鹿にしてやがったじゃねーか！！」

うつ……罪悪感が…俺だって見て見ぬ振りしてきたから、例えこの今のコータの為でも。

「我慢してきた！俺はずっと我慢してきた！普通に生きていきたかったから我慢してきたんだ！！」

分かってるよ、コータは俺の知る限り全力で頑張ってた、全力で普通に生きようとしてた。

「でももうそんな必要はない！！普通なんてなんの意味もない！！」

そつだ、そつだよな…普通なんてもう無いんだ。

「殺せる、生きてる奴だつて殺せる」

「平野君、そ、そんなことは……」

「毒島先輩先に降りて下さい、僕が後衛を務めます!!」

もう紫藤先生の声はコートには届かない。

「男子だな、平野君」

皆一斉に降りて行く、俺は…

「？石井、降りないの？」

「…んー先に降りてて、ちょっと用事が…」

「残らないよ、ね？俺たちと来るんだよね？」

俺の顔から何か感じたのか、コートが心配そうに聞いてきた。

「そんなの、当たり前だろ…残ってもしょうがない」

そう残るつもりは無い、多分…

コートも一応納得してくれたらしく、先にバスを降りてくれた。

高城が何か言ってる様だ、俺の事だろう。

しかしその辺は心配無い、平野がちゃんとフォロー入れてくれるだろう。

さて、と。

「紫藤先生……」

「い、石井君、やっぱり君は残ってくれましたか」

「嬉しそうな所申し訳ありません、残るつもりは無いです」

「ここはきっぱりしておく、気持ちが振れない様に。」

「そ、そんな……」

「ですが、俺は貴方の為に言います、聞いて下さい」

言葉に気持ちを込める、コレで紫藤先生が少しでも正しい道に戻る様に。

「こんな、宗教みたい事は止めて下さい、貴方にはそっち方面のカリスマがあるんだと思います、そのカリスマは危ないと思います。」

迷ってる生徒達を短時間で自分の宗教下に置いたのだからカリスマ性はよっぽどだろう。

「皆にはそれぞれ意見があるんです、それを、潰してあげないでください」

「…これはお願い、上から目線で脅すんじゃないくて、お願いだ。」

「守るも砕くも自由。」

「な、なにが何やら……」

「それでは失礼します、ご無事で…」

まあ自己満足だな、紫藤先生の狂気を信じられない自分の自己満足。
バスを降りて、心配そうにこちらを見ていた皆の元に歩いていった。

第8話（後書き）

どうでしたでしょうか？最近文が長くなっちゃいます、なのに進まない…

まあ長くなっても完結まで頑張りますので、宜しくおねがいします！
それでは、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第9話（前書き）

こんばんは、今回若干シリアス入ってるかもです、私シリアス嫌いなんでおかしかったらすみません。

それにしてもシリアスなんてもうゴメンです、毒島先輩の過去なんて触れてあげませんよ、絶対ではないですけど。

それと今回予約掲載を試してます、上手くできてるでしょうか。では、皆さんが楽しめたら嬉しいです、どうぞ！

第9話

「あら？あつちには残らないワケ？」

戻った早々高城の皮肉で俺の心が痛い…そして酷い。

でも最近、この痛みが無いと物足りない気がする、マゾへの目覚めだろうか？気をつけよう。

実際は大事なツツコミ役だからだろうけど。

「ええ、あちらに魅力的な物は何も無いですし」

「そ、じゃあ着いてくれば？」

「お言葉に甘えます」

さてと、コータとも話したいがその前に……

「おっばいさんが話を振って欲しそうにこちらを見ている」

「お、おっば！？……うう、大っきいて自覚はしてるけど…」

さすがに失礼だったな、うん反省。

「すみません、鞠川先生」

「良いの、どうせ私の事元気付けようとしてくれたんでしょ？」

……はい？元氣付けよう？何言ってるんだこの人。

あれ？というより元氣無かったのですか？

「ごめんね、紫藤先生に残れって言われた時に必要以上にビックリしちゃって」

「え、あの？」

「心配かけちゃったでしょう？」

「…えーと、何の話で？」

……分らない！という事だ！？

「え、あれ？なんの話って…」

鞠川先生も困惑している、誰か！説明会開いてくれ！。

議題は、鞠川先生は何が言いたいのか。

「つまり、私の事氣にかけてあんな事言っただんじゃなくて…タダの冗談だったの？」

「はい、そうですけど…」

瞬間空気が凍りついた気がした。

あれ？俺今回あれ？しか言っていない…

「う……………ふんっ」

うふん？

…なんか不機嫌そうにそっぽを向かれた。

「あんたが悪い」

「石井が悪い」

何だよっ！？

「良い？先生は……………」

く高城先生の説明会く

「本当に開いてくれて嬉しいです」

「馬鹿な事言っでないで」

すみません。

「つまりね、先生は自分が紫藤にビビっちゃったせいであんたに迷惑かけたんじゃないかって思ったの、アンタ鞠川先生に何か言ってたでしょ？」

ああ、ちょっと肩に手をおいたアレか。

「それで落ち込んでる時にあんたがあんな冗談を言ったと」

これはおっぱいさんの件だな。

「その冗談を鞠川先生は自分を励まそうとしてくれてるんだと解釈した」

そこからもう会話のキャッチボールが出来てなかったのか。

「でもあんたは違うつて言ったでしょ？」

はい。

「それで早とちりした自分に恥ずかしかったりムカついたりしたのよ、分かる？」

「先生、それで俺のどこが悪いんですか」

靴が飛んで来た。

「頭よ」

「あなたが言ってるその頭は飛来した靴で激痛が走り使えません…」

「とにかく！なるべく早く仲直りしなさいよ？こんな時に仲間内でイザコザなんて、冗談じゃないわ」

それはそうだけど。

チラリと鞠川先生を見ると明らかに故意的に背を向けている。

はあ、と溜息を付いたが事態は解決しない。

結局その後に小室達がやって来て、そのせいで鞠川先生と話す事はままならなかった。

く少し後く

「ねえ、あれ…どうしたの？」

「べつつにい、馬鹿がバカやっただけよ」

馬鹿で悪かったですね。

鞠川先生の話によると近くに友達のお家があるらしい、そこには車もあるしデカイ家だから柵もあって安全だろうと。

ついでに言うておく、まだ口をきいてもらえない。

チラチラとこちらを見てるみたいだが話しかけようとすると慌ててそっぽを向かれる。

正直疲れてきた…もう良いかな、このままで。

「それじゃ確かめてくる、静香先生、後ろに………いや」

あれ？小室こつち見てる？どうしたんだ？

「石井、行ってくれないか？」

「……………うえ？俺？」

ビックリして変な声出てしまったじゃないか。

いやいやいや、親指立てて良い顔するな！空気読んでくれ小室！俺と鞠川先生2人にしてどうするんだ！

ああ小室、頼む空気を、読んでくれ by 石井

「行くっ！行こう石井君っ、私が道教えるから！」

いきなり何ですか先生、俺もうこのままで良いやって思ってたんですけど。

はあーっ、溜息を吐く権利くらい貰える筈だ。

ゆっくり息を吐いた後、これまたゆっくり小室の乗ってきたバイクに跨る。

「先生、後ろどうぞ？」

ふう、女の子って分かんないな…女の子？ていうか先生、自分の歳を考えて下さいよー。

こうなったら自棄で爆走してやる、と思いハンドルを握ったら小室が寄ってきた。

「どうかした小室？まさか今更変わって欲しいとか？」

「違う違う…お前運転出来るのか？」

「ああそれ？……一輪車になって帰って来たら笑ってくれよ？」

「笑えないだろ」

それは分かっているよ、運転くらいやった事はある。

「んじゃあ行つて来る、小室、後は頼んだ」

「任せろ」

小室の嫌な笑顔を見ながらバイクを進ませた。

次第に皆の姿が見えなくなり、ワケも分からず不安になってきてしまった。

「大丈夫？」

「……何がですか？」

「んゝいろいろ？」

聞かないでください。

俺が答えなかったからか2人とも終始黙る。

時々出される鞠川先生の道案内しか聞こえない。

多分その沈黙が嫌だったんだろう、鞠川先生が口を開いた。

「さっきその…」

「鞠川先生が謝りたそうにしている、許しますか」

「は、早い！もうっ！私が本気で謝ろうとしてるのにつ」

「まあまず鞠川先生が謝る必要はありません、俺は気にしませんよ？」

「え、でもっ……」

「それよりもですね、こんな暗い感じの話したくないです、つまりませんよ」

「……なあにそれ、変なの」

変なのは貴方でしょうが。

「はあー、疲れちゃったー」

全てこっちのセリフですよ。

「それで？次はどっちで……ちょっと！急に体寄せないでください！」

「んっ」風が気持ち良い」

「聞いてますかっ！？」

「えーなんてー？聞こえな〜い」

「だから！イロイロ当たってます！〜！」

「きーこーえーな〜い〜」

「おっばいさん、イロイロ当たってますよ」

「あー！また言ったー！」

「聞こえてるじゃないですかっ」

あはは、やっぱりこうじゃないとね。

いつの間にかいつも通りな2人だった。

第9話（後書き）

拳句の果てに今回ほんとに進まなかったです、次回は飛ばして行きたいところですが…お家なんですよね、長くなりそうです。

なかなか進まずイライラするかもですがご理解ください、すみません。

それでは、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第10話（前書き）

こんばんは、今回ダントツで長いので注意してください。
削っても削っても文字数が減ってくれなくて困りました。

それでは、皆さんが楽しんでくれたら嬉しいです、どうぞ！

第10話

んー結構良い家だな。

窓も沢山あるし、何より本当に車がデカイ。

「ね？戦車みたいでしょ」

もうすっかり元通りの先生、この人大人な筈なのに不安定だな、大丈夫だろうか？

俺が気にする事じゃなかったね、さてみんなを呼んでくる事にしよう。

「あ、おい」

何かに鞠川先生がブンブン手を振っている。

何かって、そりゃあ小室達だけどさ。

どうやら待ってられなくなって着いて来てたみたいだ、せっかちな奴らだよ。

「それで？鞠川先生とは仲直りしたのか？」

最初の言葉がそれですか毒島先輩、家見ましようよ、大っきいですよ？

「ええ、心配ありません」

「そうか、それは良かった…ところで、そろそろ中に入ろうか」

「そうですね……あ」

鞠川先生は友達の家の子持っている。

友達が家にいない間、空気の入替えなどを頼まれたらしい。

それは良いんだけど…窓が全開だったせいか中から「奴ら」の姿が見え隠れしていた。

「多くないですか」

「大丈夫だ、お互いをフォローし合えばな」

小室も高城から武器をもらって、ヤル気満々の様子だ。

しょうが無いから俺も武器を構える事にする。

戦力にはならないだろう、でも鞠川先生と高城の護衛くらい出来る筈だ。

宮本、毒島先輩のツートップが「奴ら」に切り込んで行く。

撃ち漏らしにコータ、小室、少し遅れて俺と対処する。

一掃し終わったところでドアを閉めてコンプリート、安全な拠点の出来上がりだ、一度試してみてはいかが？

よっぽど返り血が嫌だったのか、女性陣は早速シャワーを浴びに行った。

鞠川先生の話によると、友人はかなり特殊みたいで銃やらなんやらあるらしい。

その話を聞いた後のコータは……獣の目をしていたと言っておく、いや現在進行中だ。

「せーのっ!!」

女性陣が風呂場に向かった後、男三人で怪しいロッカーを探っている。

鍵なんて持っていないからバルやなんやらでこじ開けるしかない。

「おっ、コレは弾か…という事はコッチのが本命だな」

コータが今までで一番輝いてる…

ん?……風呂場から楽しそうな声が聞こえた。

「楽しそうだな」

「だね」

「セオリーを守って覗きにいきますか」

「俺はまだ死にたくない」

「右に同じ」

あれ？ふと思っただけど、今小室一人称「俺」じゃなかった？

コータも時々そうだな、皆一人称がよく分からない、毒島先輩の言葉を借りるなら…男の子だからか。

さて、そろそろコッチのロッカーを開ける事にしよう。

てこの原理でいつきに開ける、扉はひしゃげたが中からコータの望む物がわんさか出てきた。

「静香先生の友達だっていったよなココの人…一体どんな友達なんだ？」

「それもそうだけどコータ、ちょっと落ち着こう、目が危ない」

「何言ってるんだよ石井！実銃だよ実銃！！落ち着いてられないよ！」

ああ、始まった…

「スプリングフィールドM1A1スーパー・マッチか、セミオートだけだけど…ま、M14シリーズのフルオートなんぞ、弾の無駄遣いにしかないし」

…コータが楽しそうだから良いけど、こうなったら止まらないんだよね。

何回か小室が話しかけているが銃に夢中で気にしてないらしい。

俺は小室の肩に手を置いて

「彼は…もうダメです」

なんて言ってみた。

「石井！なんとかしてくれよ！」

「俺だって何とかして欲しいよ」

しょうがないから2人でそこら辺にある銃を取ってみる。

重いなあ、少し怖いじゃないか…

ついでに銃を手にとるとコータ先生の銃自動説明が入るのでどんな物なのか直ぐ分かってしまう。

小室の手にある銃は、コータが言うにはイサカM-37 ライオット・ショットガン。

取り敢えず俺も何か手に取ってみる。

見た感じゲームで言う普通のハンドガンに見える。

「石井、それはデザートイーグル、石井の分かりやすく言うとマグナムだよ」

なんと、マグナムって言ったら西部劇みたいな回転式の奴じゃないの？

やっぱりよく分からないけど、コイツは中々気に入ったかも、持つ

とっつ。

「それ、後で少し射撃姿勢とか教えるから」

……ワケが、分らない…もう好きにしてくれ

小室が苦笑いしてコツチを見てたので銃口を向けてみる。

コータに凄じ怒られた。

その後は三人で弾を込める事に、結構面倒らしい。

「平野ってこういうの、エアソフトガンで勉強したのか？」

「まさか、実銃だよ」

「ホンモノ持った事あるのかよ!!」

俺も始めて聞いた時驚いたな！。

なんでもアメリカ行つた時民間軍事会社でインストラクターに教えてもらったらしい、頼もしい事ココに極まれり、だ。

…また風呂で声が大きくなった。

「流石に騒ぎ過ぎかも」

「大丈夫だろ」

小室がそう言うのも分かる。

俺たちが見てきた床主大橋、そこで起きてる規制のせいか、やたら騒がしい。

アレではその内全ての「奴ら」があそこに集まりそうだ。

俺達としては嬉しい限りだけど、警察達は苦勞するに違いない。

「なんだあれ、向こうに変な連中が」

いつの間にか双眼鏡で橋の上を眺めていたコータが何やら呟いた。

何かに気付いたか小室がテレビを点けた。

「警察の横暴を許すなー！！」

間髪で聞こえてきたその声はテレビでよく見るデモの様だった。

「只今、警察による橋の封鎖に対する抗議を目的とした団体らしき人々がシュプレヒコールを叫び始めました！」

ニユースのお姉さんの話だと彼らは、「奴ら」の事を殺人病など言
って政府とアメリカの造った生物兵器と決めつけてるらしい。

そこで小室の親の話になった。

「お袋さんのお仕事は？」

「小学校の先生！！川向こうの御別小学校で1年生のクラスを持つ
てる」

小学校の先生か、大丈夫だろうか？ウチの高校でもあんなだったのに…

「生徒がいる限り逃げてないな、そういう人なんだ」

「元気だったら、良いね」

「そうじゃないと、今までの苦労が水の泡だよ」

全くだ…

とその時、パンツとかなりの大きさの音が聞こえた。

こんな普通の話の中に突然割り込んできたのは乾いた音だった。

撃ったみたいだ、警察が撃ったんだろう。

すかさずTVを見ると年配の男の警官が抗議団体のリーダーらしき人物と話してる様子。

「おまえたちはあ、政府とアメリカの陰謀を隠すためにい」

「政府は最後の命令で治安維持のため、必要な全ての手段を取れと命じてきた」

え？それって……

「法律的には怪しいが、命令は命令だ」

パン。

また銃声。

しかしさっきとはまるで違う、人が人を撃った。

TVはもうついてない。

「うわあ、どうにもなくなってる、ヤバイな」

こんなのを見ても狼狽え無くなってきた事も俺にはビックリだよ。

「ひっ」

コータの悲鳴で気付いたが…いつの間にか部屋の中に痴女…もとい
鞠川先生がいた。

「こっむっろつくーん！」

「うわあっ、せ、先生？酔ってるんですか？」

半裸と言っには余りに激しい露出、そんな姿で小室の頬にキスをしている。

羨ましくないよ、ないさ。

「ちょっと、ちょっとだけよ…あ、コータちゃん」

ちゃん？

「ちゃん？あの、えと、あは」

「んーっ」

またキスをかます。

「あー、石沢くーん」

「誰ですか、石井です」

「どうでも良いの、ねえ…ちゅーして欲しい？」

なんだこの人。

本当に、しっかしてくれ…毒島先輩とか見習って…

「ねえねえ、石井くーん」

「はいはい、酔っ払いは下におりましようね……コータ見張り宜しく、小室は足のほうを持ってくれ」

「ああ」

なんで酒なんて飲んでるんだろう？こんな状況なのに…はあ

「ひゃんっ、お尻触ってるう、ダメだゾ」

「小室？」

「ち、違うつて、手が滑っただけだ…本当にそういう理由で触れた

らどれだけ幸せだと…」

「何が幸せだったって…」

鬼神が現れた。

「い、いやあの」

「あー、孝が三人いるー」

「はいい？」

ああもう、女性陣はマトモな人はいないのか…

宮本は意味不明発言した後、すんと力が抜けた様に座り込む。

こいつも飲んでるのか…

「小室、宮本頼む、鞠川先生寝かしてくる」

「悪い」

宮本の声は聞こえない、永が死んだとか何とかも聞こえない。

ついでに両立していた毒島先輩も見えない。

なんだあれ？リアル裸エプロンとか初めて見たよ。

「先輩は信じてたのに…」

「私だつて信じてるからこんな格好でも大丈夫なんだ」

上手く切り返された。

「君も、大変だな」

背負つてゐる鞠川先生を見ながら言われた。

「本当です、全く…こんな時にお酒とかどうかしてる…」

正直イライラもしてしまう。

…ダメだ、イライラしちゃうのは精神的に追い詰められてる証拠じゃないか。

「あまり…そう言つてやらないで欲しい、彼女達だつて疲れてしまつたのだ、半日で自分の日常が壊れたのだから」

「……」

さつき宮本も言つてた、疲れたつて。

そうかもしれない、女の方が心が強いとかよく言つけど…この状況ではそれも怪しい。

それこそ、こんな状況だからこそ飲んでないとやってられなかったんだろう。

その事に気付いたらさつきまでのイライラもなくなつてしまった。

変わりにまたまた罪悪感が残る、俺の罪悪感ゲージがMAXでリミットブレイクだよ。

「俺の考えが浅はかでした、すみません」

「いや良いんだ、君がそう言いたくなるのも分かる、君も彼女達と同じく疲れているのだろう」

「俺は飲みませんよ？」

「本当に…君や小室君、平野君は男の子だな」

先輩の笑顔が眩しくて、眩し過ぎて……恐らく闇属性か何かだった俺は、逃げる様に鞠川先生を寝かす場所を探す事にした。

第10話（後書き）

やはり進まなかったですね、次回には皆の幼女を出せるよう頑張ります。

あと、デザートイーグルの件ですが勿論浅い知識です、難しいことは分からなかったので間違ってる事もあると思いますが、そこはご都合主義って事でお願います。

それでは、読んでくださった方に感謝を！ありがとうございました！

第11話（前書き）

こんばにちわ、感想で指摘のあった通り、私の浅知恵のせいで石井君の武器を変えることにしました。

このような事はないようにしたいのですが、私はあまり知識が広いほうではないので間違いも出てくると思います。

これから皆さんに迷惑をかけるかもしれませんが、頑張りたい所存なのでどうかご了承を。

さて、皆さんが楽しめたら嬉しいです、どうぞ！

第11話

「うー…石井くーん」

いつもより間延びした声で俺が呼ばれる。

「なんですか鞠川先生、布団持ってくるから待ってて下さい」

「やー」

俺は疲れてるんだ、そうだそうに違いない。

「やー、じゃありませんよ、ただでさえそんな格好なのに風邪ひいちやいます」

「風邪ひくのもやだー」

……貴方も疲れたんですよね!?

「ですよ、それじゃ待ってて下さい」

「えー寒いー」

「少しだけです、ガマンしてください」

愚図る鞠川先生を置いて布団を取りに行く。

ふとんを担いで鞠川先生の元に戻ると寒かったからか体育座りをしていた。

「はい、布団持ってきましたよ、敷きますから少しどいて下さい」

「ねえ石井君……石井君今日頑張ってたわね」

俺の言う事を完全に無視して鞠川先生はまたもワケの分からない事を申された。

いきなりなんですかもう。

「今日いっぱい皆のために頑張って……保健室の時だって、あんな状況なのに薬持って行きたいって言う私の我儘聞いてくれて……」

まあ確かに苦勞しましたけど、小室達の方がキツかった筈ですよ。

「それなのに私……名前間違えたりして……う、うあ」

そこですか！？そこで泣いちゃうんですか！？

う……気まずい……

体育座りで泣いてる先生、それを見つめる生徒……キッチンの方で笑ってる先輩。

何だコレ……どうしよう、と、取り敢えず。

「せ、先生、俺気にして無いですよ？」

「うわああんっ、名前憶えられなくてゴメンなさいい」

憶えられないんですか！

「…先生、先生だって頑張ってたよ？頑張ってるのは俺だけじゃないです、だからおあいこです」

そう良いながら鞠川先生の両肩に手を置く。

…この状況を打破するにはこれぐらいしか出来なかった、だって女の人の扱いなんて知りませんもん。

だからこの状況は俺のせい、肩に手を置いた筈がイキナリ抱き締められても俺のせい。

「ふふーん、つつかまえたあ」

「へ……？」

「ふふ、嘘泣きだったの」

……殴つても良いだろうか。

豊満なバストに埋れてそれすらもままならないけど。

「でも、頑張ってたのは本当よね、はいご褒美」

おっぱいに埋れたせいで意識が混乱の真っ只中にあった。

ご褒美どころでは無い、その前に死んでしまっ。

死因、乳埋れ。

しかしなんとも不思議な物で、そんな余裕無い中でも頭の上に生まれた温もりは感じた。

なでなで。

「よしよし、よく頑張ったわね」

……。

鞠川先生……………そろそろ乳苦しいです。

どうやら無意識に力を込めつつづけてるらしく、本当に苦しくなってきた。

もうどこが上でどれがおっぱいだか分からない。

俺が乳で乳が俺で…もうワケが分からない。

吾輩は乳である、名前は石井。

そんな言葉を最後に俺の意識は飛んだ。

く15分位後く

銃声で目を覚ました。

最近近くで銃声を機会が多かったせい、アニメの様に飛び起きる

事は無く良い目覚まし時計の代わりになった。

…あれ？鞠川先生は？

周りを見渡すと布団の中で気持ち良さそうに寝ていた。

…俺も寝てしまったんだ、寝る前の記憶があやふやだが…今は考え
ても仕方ない。

「あの銃声は、二階だな…」

恐らくコートが撃った物だと思われる。

何かあったんだろうと思い、二階に行こうとすると階段で小室にあ
った。

「まだ階段にいたの？」

「あー、えと…まあ」

？何かあったのか？宮本は笑ってるけど。

「それは置いといて、さっきの銃声を聞いたか？」

「ああ、たぶんコートだよ、何かあったかな？」

「とにかく行こう」

二階に行く途中、イヌの鳴き声も聞こえたが…関係あるのだろうか？

「平……」

「ヤバイよ」

小室の声を遮る様にコータの声がベランダから聞こえる。

余程の事態なのかいつもより声が低い。

「……!!」

ベランダに行ったら直ぐに分かった、橋に集まっていた筈の「奴ら」がココへ集まりつつあるようだ。

そう、これが最初の夜、その本当のはじまりだった。

集まった理由は恐らく吼えまくってる犬だと思う。

集まった「奴ら」の中に生きている人もちらほら見えた、夕方は見なかったのに…

「あの人、ショットガン持ってるのか…」

もしここまで辿り着いたらドアを開けようと思いだ下の階へいこうと振り向いたらいつのまにか毒島先輩が立っていた。

服はまだ裸エプロンだった、どうしたんだよこの人。

「石井君、何しに行こうとした？」

「え？いやあの人、ショットガン持ってるんです、ココまで来れたらドアを開け…」

そう言いながら振り向くとショットガンの方はもういなかった。

否、「奴ら」に喰われたんだろう。

「そ、そんな…今さっきまで生きて…それに銃だって持ってたのに」

「この状況では銃1つじゃどうにもならない、銃も勿論使えるだろう…でもそれより、仲間の方がずっと心強い」

…その通りかもしれない、いやその通りだろう。

「畜生っ、ひどすぎる!」

俺と毒島先輩の話を聞いていなかったのか小室がショットガンを構えようとし、毒島先輩に止められた。

「小室っ」

「なんだよ?」

コータの声に小室が苛立った声を上げる。

自分は人助けのつもりなのにソレを止められるのが理解者出来ないって所かな。

「撃ってどうするつもりなの?」

「決まってるだろ！」「奴ら」を撃って……」

「忘れたのか？」「奴ら」は音に反応するのだぞ小室君」

「……！」

…正直俺も忘れてた、ずっとコータを見てたせいか銃を過信し過ぎつつあるのかもしれない。

「そして…生者は光と我々の姿を目に群がってくる」

だから人も集まってきたわけか。

それと先輩、他の言い方は無かったんですか？

「むろん、我々は命ある者全てを救うチカラはない！！」

……コレは…そうかもしれないけど……小室にとっては地獄谷だよ。彼らは自分の力でどうにかするしかない、自分達がそうしてるように。

「何が言いたいかは分かる、君は過去一日に対して、男らしく立ち向かってきたと宮本から聞いたよ」

小室が親の話をしていたな、生徒が居るなら逃げないと…その親にしてこの子ありだよ。

「だが……よく見ておけ、慣れておくのだ！もはや、この世界はた

だ男らしくあるだけでは生き残れない場所と化した」

「…毒島先輩はもう少し違う考えたと思ってた」

俺は、毒島先輩ならそう言うんじゃないかと思ったよ。

「間違えるな小室君、わたしは現実がそうだと言っているだけだ」

いまの現実とは、正直最悪だ！俺もコレからどうなるかなんて分からない！…もう知ってる事なんて何1つ無い。

今はもう俺もココのセカイの人だ、この先に起きる災難に備える事ももう出来ない。

俺は…何かできることがあるだろうか。

第11話（後書き）

前半鞠川先生で潰れてしまった…信じられない…

それに結局ありすちゃん出ませんでした、なかなか上手くいかない
ものですね。

それでは、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！
した！

第12話（前書き）

こんばんは、今回は初めて石井君以外の視点をやってみました。
初めての試みなので上手くいってるかどうか……
いい出来だったからこれからもタマに使っていけたら良いかなと思っ
てます。

それでは、皆さんが楽しんでくれたら嬉しいです、どうぞ！

第12話

小室が毒島先輩の言葉に納得したかは微妙だろう。

今だって不満気な顔で外の凄惨さを見ている。

必死に戦っている人、逃げ惑う人、もはや何もかも諦めて座り込む人。

全員、生きてるのに……

その時、ふと逃げ延びている人が目に見えた。

あれは……親子だろうか？

~~~~~

「うぐ、くそっ!!」

どこか、どこか安全な場所は無いか。

「奴ら」から逃げ始めてもう何時間たったのかも分からない、もう何体と遭遇した事か…

こんなレンチ一本でよくココまでこれた物だな…

もう、ダメかもしれない…何軒か家を回ったが全て中に入れてもらえなかった…

目の前の家からは光が漏れている、ココがダメだったら…もう…

「パパ、ママは？」

……あります……ママは…

「ママとは後で会える、ほらこっちだ」

そうだ、この子を安全な場所に連れて行くまでは、私は死ねない。

思い切って他人の家のドアを叩く、心が広く勇気のある人が中にいることを願いながら。

「お願いです！入れて下さい！子供連れで逃げられないんです！」

「奴ら」は多分直ぐに寄ってくるだろう、早く開けてもらわなければ直ぐに死んでしまう。

「来るな！よそに行ってくれ！！」

帰ってきたのは予想通りの言葉、だがココで諦められない。

「頼む！自分はどうでもいいんです！子供を、娘を！！」

扉は…開かない…

なんて！なんて心無い人なんだ！ちよつと開けるだけじゃないか！！

そう叫びたい心を押し殺し…しかし殺しきれなかった。

「開けてくれ！開けてくれなければドアを壊す！」「奴ら」が入ってくるぞ！」

必死になつてゐる内に私は、強行手段をとつていた、やむをえまい。

「ま、待ってくれ！いま開ける」

鍵を開ける音がした後、直ぐにドアが開く。

ああ、良かった…コレで息をつける…

正直脅迫などしてどうなるものかと自分を叱つた物だが、開けてくれるならばどうでも良い、逆に褒めたいくらい……

しかし、そこまで考えてた思考は体に侵入してきた異物に絶たれた。

「あ……」

包丁が刺さつてた、深々と体に包丁が刺さつてた。

中にいた人達も必死だったんだ、自分の事を守りたくて…自分の家族を守りたくて…

だから刺された、ドアを壊すと脅した私を殺そうと包丁で刺した。

だから仕方ない…とは言い切れない、けど運が悪かったのかもしれない。

「パパ！パパ！」

ああ、ありす…ありすには死んで欲しくない…

その一心で言葉を紡ぐ。

「隠れなさい、だれにも見つからないように…」

ありす、ありす…ああ、もう体が動かない…目の前も暗くなってきた。

「いやだあ、いやだよお」

ありす、ダメだ…逃げるんだよ。

その声も、もはや出てこない。

「パパと一緒にいるうーずうつとパパと一緒にいるのおー!」

にけるんだ…もう、パパは…

~~~~~

「く………そっ」

全て俺達は見えていた、見ていただけ。

今もあの小さい子に襲いかかろうとしてる「奴ら」を見てるだけ。

小室…俺も齒痒いのは同じだ、あんな子を助けられない。

どうしようも無いのか…

「ロックンロール!!」

その声は響いた、いつも頼りにしてる友達の声、そして彼を…コータを象徴する銃声。

あの小さい子を襲おうとしてた「奴ら」の頭が飛んだ。

ハッとして隣を見ると、コータはいつもののほほんとした顔ではなく銃を持った時の顔をしていた。

「コータ……」

チラッとこちらを見て、コータはやはりいつもと違う残忍な笑みを浮かべる。

「試射もしてない他人の銃で、いきなりヘッドショットを決められるなんて! やっぱこういう事は天才だなあ俺」

「…俺も、そう思うよ」

「はは、ありがとう石井、ま、距離は100も無いんだけどね」

十分だろう? 俺なんか…違うな、一般の高校生はふつうの銃でヘッドショットなんて決められない。

やっぱりコースは、頼もしい。

毒島先輩や宮本だって頼もしい事は頼もしい、けどコートはどうしても凄いのと思うてしまう。

同じ男だから実感が沸くのだろうか？

「撃たないんじゃないのか？他人は見捨てるんじゃないのか？」

小室が最もな事を言ってるが……確かに、どうしていきなり助けたんだ？

「小さな女の子だよ！？助けるんでしょ？僕が援護射撃するから！」

おいおいコート、おまえが、自分はロリコンでありますっ！て言ってるようにも取れるぞそれ。

お、小室も良い顔になった、さっきまでの顔よりかぜんぜんイケメンだ。

さて、俺は…何かできる事はあるか？

「音を出し過ぎた、もうココは出る事になると思う…石井は皆に支度をする様に言ってきた」

なるほど、情報把握もお手の物だな。

ん？この音はバイクか…小室、ちゃんと助けてお前も戻ってこいよ。

下に行くと高城と鞠川先生の2人は、まだ起きてなかった。

「宮本さん、毒島先輩！ココを出るそうです、直ぐに支度を！」

「ああ、そうだろうと思い支度していた」

流石です。

「高城さんと鞠川先生は？」

「じきに起きるだろう」

そうですか、と呟いて持つて行く物をバックに詰め込む。

お？高城がいつの間にか起きて、鞠川先生を起こそうとしてた。

…うわ、そっぴや鞠川先生に何か着せるの忘れてたな。

何にも着てない事に気付いてないのか、そのまま高城に連れられて上に行ってしまった。

コートの顔が真っ赤になる様子が手に取る様に分かる。

「これは要る物でつと……毒島先輩、小室大丈夫そうでした？」

「聞くまでもないだろう？男の顔をしていたよ」

それはそれは、全く聞くまでも無かったです。

第12話（後書き）

今回やっとありすちゃん登場です、待っていた人ごめんなさい。

石井君があんまり目立ちませんでしたね、今回は仕方ない場面だとも思いますが…なんとかしたいです。

それでは、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第13話（前書き）

こんばんは、唐突に旅行が入って投稿できませんでした。
なので、今回は二羽連続です、よろしく願います。
追記、13話でした…すみません

それでわ、皆さんが楽しめると嬉しいです、どうぞ！

第13話

少ししたら高城と、まだ真っ裸の鞠川先生が降りてきた。

そろそろ何か着ましようよ？露出狂ですか。

「すっぽんぽんのぽんぽこりん、鞠川先生すっぽんぽん」

「なんつー歌を歌ってんのよ……そういえばあんたは平野みたく反応しないのね」

昨日嫌というほど堪能しましたから。

「ねえ、この荷物何処におくのー」

鞠川先生がまだ寝ぼけ気味なのか真っ裸で聞いてくる。

「その前に、静香先生はとりあえずなんか着て」

「あつ、なんか寒いと思ったら」

そんな言葉って本当に出てくるんですね、アニメや漫画だけだと思っ
てましたよ。

「静香先生、着終わったらクルマの準備！」

「今なら車に乗り込めるな、「奴ら」は小室君に引きつけられてい
る」

それは喜ぶべきか微妙じゃないですか？

小室の通っていった道を見ると、見た事もないほどの「奴ら」で埋まっていた。

「どうするつもりよ、あれじゃ小室…バイクでも戻ってこれないじゃない」

確かに、あの大量の「奴ら」を蹴散らしながら戻って来れるとは到底思えない。

増してや歩いてくるなどは論外、つまり小室はまったく動けない状態だ。

「なら……」

鞠川先生だ、正直なにを言おうと期待はしてない、まだ寝ぼけてるみたいだしね。

「迎えに行つてあげるしかないんじゃない？」

あ。

四人の視線が鞠川先生に集まる。

それを鞠川先生は自分がまた変な事を言ったと思ったらしい、両手を頬に当てて困惑気味に

「く、車のキイとかはあるんだし…」

と言い訳の様に呟いてる。

いやいやいや、まさかそんな簡単な事だったとは。

そうじゃないか、小室が動けないなら…こちらが動いてやればいい。

「鞠川先生、良い判断ですよ」

「決まりね！！小室を助けた後、川向こうに脱出！！」

その言葉で俺は荷物を運ぼうとそちらを振り向く。

「しかし、本当に荷物多くなりましたね」

「少なくなるよりは良いだろう？持って行けるだけ持って行くんだ」

こんだけ多かったら、運ぶの大変だな…「奴ら」が寄ってこないとも限らない。

「盗賊みたいにコッソリやるしかないわよ」

だな。

素早く皆で動く、鞠川先生は運転席で毒島先輩は周辺の警戒。

他三人で荷物を運ぶ。

あらかた積み終わると、何やら高城がキョロキョロしていた。

どうしたんだろう？何かあったのだろうか。

「平野は？」

ああ、なるほど。

「まだ二階じゃないんですか？」

「つたく凄いんだかニブいんだか…」

呼んでこようか…と思ったたら来た来た。

来たんだけど……なんだそれ。

「コート、凄い格好だね」

頭にライト、両手に重を持ちかたから弾を下げて……こんな高校生が今までにいただろうか？

「それと楽しそうね、アンタ」

「たいしたことないですよ、小室にくらべたら」

対した事ないのかそれで？じゃあいつたい小室は何やってるんだ？

「さて、全員乗ったか？」

毒島先輩の声に皆が頷く、準備は出来た。

「静香先生」

「もう行けるわ」

よし、それじゃあ。

「出発！」

鞠川先生がアクセルを踏み、ハンビィーが動き出す。

車の屋根に毒島先輩が立ち、コータが車内の上から体を出して、いつでも撃てる様に構える。

「うわっ っぱい」

「でも、逃げる訳にはいかないんだから……」

「突撃っ！！」

高城が叫んだ瞬間、何体もの「奴ら」が吹き飛ぶ。

すぐに混む露の姿が見える。

なるほど、あれは確かに楽しそうだ。

下が「奴ら」に埋れた家の塀を歩いてコッチに来ていた。

「はっ！」

コータが気合の声とともに銃を撃ち、周りの「奴ら」が跡形も無くなる。

「川向ここの最終便だ、乗るかね」

「もちろん!!」

こんな時に冗談ですか先輩、もう。

小室がこちらに飛んでくるのを確認しながら鬱々と考える。

それにしても、俺本当に何も出来なかったな…

一連の行動を思い出し、少し凹む。

やめやめ、できる事からしよう。

前を見ると少し息をついてる鞠川先生がいた。

さっきまで寝てたからか、頭の寝癖が取れてない。

俺のできる事…取りあえず……

俺は、目の前の寝癖あたまを見ながら手の中の櫛を弄って少し苦笑してしまった。

これから……小室達の親を探して再会する、そのためには川を渡るしかない。

この前までの俺達では何も出来なかっただろう、でも今は何もかも違う。

装備もあるし食糧もある、なにより車がある。

乗ってきたバスじゃあ川を渡るなんて出来なかった、前に進むかも

怪しいし紫藤先生も許してはくれなかっただろう。

もうその紫藤先生もいない、それにコータの話だと今乗ってるハンビーは水陸両用だと。

随分と前に進んだ、この調子で行けばずっと生き延びる事なんて容易じゃないか。

そう思った、そう思ってしまった、だから…だからいつも俺は甘い。

第13話（後書き）

どうでしたでしょうか？

やっと家を抜けましたね、これからです。

このペースだといいんですけど…明日から投稿できません、もうしわけございません。

それでは、読んでくださった方に感謝を！次話へどうぞ！

第14話（前書き）

こんばんは、本日二話目です、誤字多いかもです。

後はひとつ前のより長いです、注意を！

そしてここが一番大事です、今回オリジナル分多めです、**厳重注意**を！

それでは、楽しめてもらえたら嬉しいです、どうぞ！

第14話

只今川の真っ只中、「奴ら」は寄ってこない。

「はは、全く、仲の良い事だよ」

上で高城の叫ぶ声が聞こえる、多分コータの歌っていた歌が問題な
んだろう。

俺も聞いたけど……正直無いと思う、まあ自分で歌う分は何でも無
いんだけどね……ありすちゃんに歌ってあげるのはちょっと……

「さてと……鞠川先生」

「ん？出来た？ありがとう」

ある事をしていた為、少しだけ車を止めてもらっていた。

俺は手を動かしていた、勿論鞠川先生の寝癖を直す為に櫛を駆使し
て。

「上手い、くしをくしして……座布団……」

「二枚ぼっしゅ」

だ、そうだ。

最近鞠川先生が俺の話について来れる様で、すこし楽しかったりす
る。

「皆起きてー、そろそろ渡り切っちゃうわ」

三人とも疲れが来たらしく後ろの席で寝ている。

宮本が、小室のひざで寝ている毒島先輩を忌々し気に見てるが…青春だねー

「誰もいない、か…」

「奴ら」もだから、何も居ない、が正解じゃないか？一々訂正する気は無いけど。

「ひぎゃあああああつ！？」

恐らく小室がたたき起こされたかなんかだろう、コレだから主人公は。

つてより小室はどうするんだろう、ハーレムでも作るつもりか？

とりあえず小室のハーレムは置いとくとしてだ、川の向こうには付いたみたいだ。

「石井、いつまでそこにいるつもりだ？殺されるぞ」

うおっといけない、いつのまにか皆車を降りて着替えようとしていた。

しかも俺は助手席に座ってて、車の目の前で着替えようとしていた皆がコツチを睨んでる訳で。

「はいはい、今行く」

まあ、苦笑いしながら俺も後ろに向かうしかないだろ？

「今こそ御約束の時だ、勇者小室よ！！覗きに行くのだ！」

「だから死にたくないって！」

「……………はあー、何の話してるかと思えば」

「石井だつてずっと助手席にいたじゃないか」

「ボケっとしてただけだ、コータとは違う」

ワン！

「んお？同意してくれるの？ワンコ」

「酷いなあ、まああんまり吠えるなよジーク」

「ジーク？」

ん？ジーク？俺も知らないな、何それ？

俺と小室が顔を合わせていると、コータが説明してくれる様だ。

何でも、ジークって言うのは大平戦争でアメリカが零戦に付けたあだ名だそうだ。

犬に付けるにしては大層な名前みたいと思ったけど、小室曰く小さくてすばしこいから丁度良いつて。

そう言われたらそうかもしれない。

「小室は、コレを使えよ」

ショットガン、散弾が出てくるみたいで近くで撃てば小室でも頭が拭き飛ばせるらしい。

小室は使い方が分からないって言って渋ってるけど…コレから重宝するんじゃないかな。

「それから、石井はコレを」

そう言つて渡されたのは…小室が最初に持ってた奴か？

「SMITH & amp; WESSON M37 エアウェイト、やつぱり石井にデザートはキツイかなつて」

なるほど、こつちなら軽いし…近くで撃てば当たると。

「いざとなつたら棍棒がわりに使つた」

なんて無茶な。

「小室、生き残る為なら…」

「分かつてる」

はあ、小室ももう少し話を聞いても良いんじゃないのかな。

「おにーちゃん！」

ん？ありすちゃんの声だな。

…小室が近づいていって…ことばを失った。

「どうかしたの？小室…」

コートも近づいていって…顔が強張る。

だからどうしたんだよ？

仕方無しに俺も車の横側へ、間違っても皆の着替え姿とかじゃないだろうな？

そんな俺の心配は…良い形で裏切られてしまった。

着替え姿というよりも着替えていた、2人はその姿に言葉を失ったんだろう。

まあ似合ってるけどさ、流石にオーバーじゃない？

「クルマを道に上げるから、安全確認！」

「イエスマム！」

……何も言わないぞ、何も。

コートと小室、プラスで俺の三人で安全確認に道に出る。

両方向、前に銃口を向け…誰も、何もかもいない事を確認した。

「良いですよ！先生！」

「いっくわよー！」

結構な坂を、もろともせずにハンビィーが駆け登る、コートが轢かれそうになったけど…誰も何も言わないから俺も何も言わない。

けど、川向こうに来たのに…「奴ら」の被害は一緒か。

「それで？誰の家が近いの？」

「高城が近いんじゃないか？」

「いや、小室…その前に石井の家に行こう、近いよ」

「ん？そうなのか、石井？」

「あ、そっぴやそっぴかも」

……なんだよお、皆して笑うことないだろ。

「ここから歩いて徒歩五分」

「近いな…どうする？」

「皆でそろそろ行っても「奴ら」に見つかるだけかもしれない」

「あ、じゃあ俺１人で行って来ましようか？」

「それはない、論外だ」

じゃあどうするんだよ？

「数人で行こう、私、石井君、宮本……」

「わ、私！行きたいかな……」

鞠川先生？いやいや、逆に動きづらく無いか？

「理由は？」

だから怖いですよ先輩。

「え、と……石井君のお家見たい……」

………そうですか、ってなんだそれ！？

「………良いだろう、私と石井君、鞠川先生で行ってくる」

ええええっ！？

「そんな顔をするな、君が鞠川先生の護衛をやってくれればいい」

「そうですけど……」

大丈夫だろうか……

他の皆は車の中で今後の事や荷物の整理をするらしい。

車を動かさず、極力喋らなければ「奴ら」はあまり寄ってこないみたいだ。

「それじゃあ行ってくる」

「気を付けて下さい、冴子さん」

「ありがとう小室君」

あの、イチャイチャしてないでもう行きましようよ？

〈5分後〉

うん、久しぶりに見た気がする…母さん達、生きてるかな…生きて欲しいな。

「大丈夫か？」

「ええ、問題ありません…」

エレベーターを使うのが怖いので階段で登る。

言い忘れていたが、俺の家はアパート…10階。

毒島先輩は分かる、けど鞠川先生まで息切れてないってどうゆう事

だ！？そこそこキツそうだけど。

「こゝ、ここです……ふう」

「大丈夫か？」

「それさつきも言いました」

「ふふ、そうだったな、それじゃあ行こうか？」

ドアの前に行く途中、「奴ら」が何匹か襲ってきたが……まあ先輩チ
ートだと言。

「……………」

ドア前まで行ったが……開けづらい。

「石井君？私、開けてあげようか？」

「いえ、構いません、ありがとうございます先生」

うし、覚悟はできた……生きてたらラッキー、それ以外は運が悪かつ
た。

「あけます！」

瞬間、ドアのきしむ音がして……イキナリ何かが俺にのし掛かつて
きた。

「あー！っ！うおっ！？」

「奴ら」だ！これはマズイ！！すかさず鉄パイプを…この体制だと取れない。

「うぐ！くそっ！！」

何とか立とうとするが…ほんとに力が強い！

「ふっ！」

先輩の声が聞こえたかと思うと体が一気に軽くなる。

向こうに拭き飛ばしてくれた様だ、ありがとうございます先輩。

「大丈夫か、石井君？」

「痛たた、掴まれた左手がちょっと…」

なんて力だよ、ちょっと舐めてた。

「きゃああああっ！？」

「鞠川先生！！」

しまった、鞠川先生が狙われてしまった。

少し向こうで、鞠川先生がさっきの俺の様に組みつかれている。

少し離れたせいで、鞠川先生の上の「奴ら」の姿がよく見えた。

「え？あれ……」

「石井君！鞠川先生をつ……くっ！」

どうやら反対側から大量の「奴ら」が来てるらしい。

それさえも、俺の頭には入らなかったが。

「あ…母さん？」

あの服は、母さんの服だ…鞠川先生に組みついてる「奴ら」が…母さん？

「石井君っ！？」

噛み付かれそうなのを必死に避け、それも限界なのか鞠川先生の声が悲痛に聞こえる。

「あ、ああ…嫌だ、そんな事」

覚悟はできた？おいおい、全然出来てないじゃないか、どうした？

「母さんが……母さんが」

待ってくれ、なんで？だって母さん…昨日だって、元気で…

その瞬間、パァン！ともう慣れた音、銃声が。

俺の迷いを全て無視した音。

中々良いところに当たったのか、鞠川先生に組みついてた「奴ら」……母さんが吹っ飛んだ。

「そんな……誰が……」

いやまで、銃声だぞ？毒島先輩は木刀だし、鞠川先生なんか非戦闘員じゃないか。

「お……俺？」

いつかみたいに自分の姿を見る、手はもう俺の物で無いかのように、勝手に銃を構えていた。

もちろん、銃口からは硝煙。

「石井君っ！まずい！逃げるぞ！……石井君？」

「……はは、もう駄目なんだ……俺もきつと……「奴ら」に」

だらりと手をさげ、力無く俯く。

駄目だ、もう何も考えたくない。

俺の母さんはこの人が最初じゃない、この母さんだって本当は石井の母さんだ……「俺」の母さんって言えないかもしれない。

けど、凄く優しく……暖かいこの人を……俺は好きだったんだ。

それ故に、もう俺は駄目だと……思った。

思ったけど……また、この人が助けてくれた。

パン！…今度は銃声じゃない、俺の頬が張られた音。

俺の絶望を払ってくれた音。

「ま、鞠川先生……」

「……石井君、逃げよう？私、ずっと一緒にいるから……ね？」

鞠川先生…ありがとう

「行くぞ！石井君、鞠川先生！」

引き摺られる様に手を引かれる、涙で前は見えない。

そつだから、迷子にならない様に…この手は放さない。

第14話（後書き）

はい、ということで…嫌いなだけあって雑でしたね、はは。
そろそろ原作にも追いついてきた気がします、ラストスパートです
ね。

それでは、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第15話（前書き）

おひさしこんばんにちわです。

やっとこさ勉強も終わり、なんとか投稿できました。

これからわペース落ちると思いますが完結はさせるのでよろしくお願ひします。

それと久しぶりなので色々変ですが…勘弁してください。

それでわ、皆さんが楽しめるとうれしいです、どうぞ！

第15話

「すみませんでした!!」

きつと、今の俺をヨコから見れば上半身と下半身が見事な直角を描いている事だろう、見たかった。

「俺のせいで2人を危ない目に……」

まあ、俺が謝った所でお人好しの2人は困惑顔になるだけだろうけど。

当たり前だ、仲間だろう?とかカツコイイセリフ言っちゃってさ……

……俺にはそんなイベント全然無いよね、本当にモブだなあ。

あれだよ、こうなったら最高のモブリストになってみせるよ。

皆の見せ場を作る縁の下の力持ちになりますよ、それで良いんですよ!

俺の予想は全く大当たりでだった訳で、毒島先輩がそれっぽい事言った後に皆の元に戻ることにした。

その道中思ったけど、縁の下の力持ちだったらさ……やっぱりある程度強くならなきゃだね?

うわー、どうしよう?俺普通の一般人ですよ?しかも本当は既に死んでる筈の。

毒島先輩に剣の扱いでも習うかな……小室がやりそうだな、自重しとう。

「石井君、着いたぞ？」

「え？……うおっ！？」

考えながら歩いてたせいかコケてしまった、本当運が無い。

「アスファルトって、こんな硬かったっけ…アスファルトの中にビスケットが……」

「石井君……？」

いけないいけない、鞠川先生が不思議そうに見てるじゃないか。

皆から変人と思われたくは無かったので、ヨゴレを払って立ち上がりつつ、また思考。

このままじゃ、皆の迷惑だ…俺だけ、やはり俺だけイレギュラーだからだろうか。

なんと言っても役割が少ない、回ってくる仕事が無い。

「はあ、どうしよう…」

「とりあえず車に乗るってのはどう？石井」

「……うおー！？」

いきなり目の前に現れたのは、コートだった。

「そんなに驚かれても…どうしたの石井？」

「え？…ああ、いや別に何も？」

「……………何か、あったら言ってくれよ？」

「分かってる」

それで話しは終わり、コートとクルマのほうへ歩いて行くのでした。

「石井君っ！！石井君っ！」

誰か……呼んでる？

「ふぁ…………ん？何処ここ？」

確か、高城の家に行くんだっただよな？東坂二丁目の。

それは寝る前に聞いてたんだが…ここはどこだ？

車内から外を見ると、やたら多い「奴ら」とワイヤーしか見えない。

って、流石に多過ぎる！？

「ど、どういう状況なんだ!？」

「落ち着け石井君!」

ハッと隣を見るとドアの方に毒島先輩がいた。

まさか…

「出るんですか…意味が分かりません!どうなってるんですか!？」

「石井君が寝てる間にな、コレが動かなくなってしまったのだ」

車の事か?…そんな、なんだってこんな時に!

「今、2人は外にいる…私が助けに行かなければ2人は危ない」

周りを見ると小室と宮本が何処にも居ない…

「だから、私は行く!仲間を、守るため!」

そう言って車内から出て行ってしまった。

「……」

正直まだ状況がよく分からない、でも何となくヤバイって分かる。

「ああもつつ!」

…あれ?何で俺…外に出てんだろっ?

あーあれだ、俺もカツコ付けたかったのか。

だってさ、小室もコータもカツコ良い事し過ぎでしょ、俺もしたかった訳だ。

今だって、皆のために毒島先輩と2人で突撃していつてる。

俺たちから「奴ら」の注意を外す為か。

カツコ良いなあ、もう主人公だよなあちくしょう。

「コータ、援護よろしく」

「え？石井？」

期待してた通りコータの返事が返ってきた。

「うおおおおあああああつ！！」

いつだったかの時よかハイになってるな、死ぬかもしれないからかな。

最高にハイって奴か。

「俺もカツコ付けたいんだらああつ！！」

叫びながら一体目の頭を鉄パイプで叩く。

「なんで勝手に話進んで、んだあつ！！」

二体、三体と最早頭を狙わず弾き飛ばす。

「そんなに俺を空気にしたいのかよおおあああつ!!」

今まで溜まっていた色々を「奴ら」と共に吹っ飛ばし、何だかクールになってきた。

「はあ、はあ、どうだよ…もう…」

階段を登り、ある程度安全な場所に辿り着く。

あ、反対側に小室と先輩。

「結構、「奴ら」引き寄せられたんじゃないかな？」

車の方を見て……落胆する。

あまりにも多過ぎて、コチラに注意を向けられたのは少数だった。

いや、落胆したのはそこじゃない、問題は突然現れた謎の消防隊（？）だ。

消防隊は車近くの「奴ら」を空気砲か何かで吹き飛ばし、なんと鞠川先生達を救助してしまった。

俺と小室達の頑張りは一休……

「石井!!」

おっと、小室が呼びだ。

「何？小室？まさかそこから俺のパンツでも見えたか？キヤー孝さんのえっちー」

「お前ズボンじゃないかつ！！………今はふざけてる場合じゃない」

「分かってる、でもいちいちシリアスにしなくても良いだろ？」

全く、皆してシリアス大好きなんだから。

「はぁ、お前…自分の状況分かってるのか？」

はいはい、分かってましたよ。

そう、俺は今絶体絶命だ、何故なら1人だけ単騎だから。

小室は一応毒島先輩といるから安心だろうし、鞠川先生達はどうも救助されたみたいだし。

本当もう、世界は俺に生きてて欲しく無いんじゃないかと疑いたくなるよ。

「俺達はこつちから高城の家に行こうと思う、お前も高城の家に！」

「石井君！分かっているな！」「奴ら」との戦闘は極力避けるんだ、1人では危険だ！」

「分かってます分かってます、2人は俺の両親ですか、とにかく早く行って下さい」

「しかし…」

「俺は、死にませんって…コレで安心ですか？」

「……気をつけるんだぞ」

「石井、高城の家でまた会おう」

そう言い残し2人はその場から行ってしまった、さてと。

俺も、行こうか…

高城が待ってるからとか言ってるけど、多分小室に向けてだろうね…俺待ってくれてる人とかいるのかな。

まあ、咄嗟に思い浮かんだのはコータと鞠川先生か。

「じゃあ俺、2人の為に頑張っちゃおうかな」

変に元気だしね、俺。

さっき叫んでストレス発散したせいか、体が軽い。軽井沢。

大丈夫だ、「奴ら」と戦わなければ…

踵を返し、周りに「奴ら」がない事を確認してゆっくり歩いて行く。

まだ死ねないよ俺。

第15話（後書き）

はい、終わりです。

なんとなく分かってるかもですが次回はオリジナル回となっています、ご注意ください。

それでわ、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第16話（前書き）

こんばんは、オリジナル回であります。

矛盾点、時間軸、その他もろもろおかしいかもですがご了承ください。

それでは、皆さんが楽しんでいただければ幸いです、どうぞ！

第16話

俺は、高城の家に向かう為に、少し周り道をしなければならなかった訳だが…遠いなあ。

ここら辺の地理はある程度分かる、東坂二丁目も分かる。

それよりあんな立派な家を知らない訳がない。

故に今俺は凄い遠回りしてる事は分かっている。

一日そこらじゃ到着出来ないんじゃないかな、せめて毒島先輩達の方向だったらまだマシなのに。

「ま、鞠川先生達が「奴ら」を引きつけてくれたお陰で戦闘はあんまり無いけど」

最早ソレだけが頼りだった、大体なあ…俺石井君だよ？ソロ活動して良い訳ないだろう？死んじゃうって。

「困ったなあ」

いや本当に、まだ死にたくないけどコレは無理ゲー過ぎるでしょう。

どうしようか、たまに来る「奴ら」は、弾を無駄にしないよう鉄パイプで捌いているが…それもいつまで持つか。

なにより…睡眠は？どうしろって？

「安全な場所探さなきゃな」

近くのコンビニとかに籠もろうか…いや、そんなの袋の鼠だろう…
…。

既に辺りは暗くなり始めている、どうしたものか。

いつものように考え事をしながら歩いていると何やら前方が騒がしい。

「何だろう？ なにか……」

俺の言葉はそこで途切れた……。

何故なら、前方100も無い所でバイクを乗り回し、釘バットやらで「奴ら」を殺し回ってる集団がいたからである。

「うわ、あれって小室が言ってた頭可笑しくなっちゃった連中じゃないか……」

何だこの追い討ち！？俺に安息をください！ついでに寝床も下さい！追加でホイコーローも！！

「お？また生きたやつか？おい！次はあいつだ！」

「アニキ、あいつって誰でやんす？」

「お前だっつの！？仲間の振りしてんじゃねえ！！」

バレたか、しかし良いツツコミだ。

「うし、あのクソ野郎は俺が殺す、お前ら下がってる！ひゃっはーっ！ー！」

まずい！？

バイクのスピードを上げ、突進をしかけてきた。

真っ直ぐなら、横っ飛びで避けれる筈！

タイミングを見計らって、横に……

「ぐはあっ！？」

避けた筈が腹に衝撃波が走った、なんで？

「ふへへは、バイクを避けた時は焦ったがぁ……俺はバットも持つてんだぜえ？」

な、なるほど……バイクのスピードのままバットで殴られたのか。

「凄いなあ、体が動く気しないね」

「くくくく、そうだろう……トドメを刺してやる、ひゃひゃひゃひゃー！」

助走をするために、俺の側から離れて行った。

いやまあ……その………今がチャンス。

すかさずバツと飛び起き狭い路地に飛び込んだ、動かないわけあるか。

「うらあおっ！！死ねえ…あれ？あいつ消えた！？」

とか馬鹿な声が聞こえるけど放置、降りて追ってこないとも限らないからダツシユ。

「ぜえ……ぜえ……しんど……」

ホントに。

正直ビビってました、全然クールじゃなかった、だって一応腹に怪我しちゃったしね。

いてええ、ちょーいたい。

派手に飛ばされはしたけど思ったより怪我は浅い、でも痛い。

そっぴや、バツト折れてたような……俺に当たった瞬間に折れたのかな？元々折れそうだったんだろっね。

でも思ったより、ってだけで怪我は怪我だ、中々行動が制限される。

この状況だから……致命傷と大差ない。

「いやあ、マズイ……ホント冗談じゃない」

直ぐに、早急に安全な場所が必要だ。

あ、あれで良いんじゃない？あの上、公園トイレの上。

「奴ら」は登ってや来れないだろうし、音を立てなければ寄ってこない。

何よりホントに眠い、今何時だちくしょう。

「よつと……あだっ?!」

以外と高かった、それだけ安全だけど。

あ、また腹が痛み出した…鞆川先生に見てもらおうかな…生きてたら。

俺の思考もそこまで、グッスリ行ってしまった。

（起床後、5時間経過）

もう、ダメ……

予想外に腹のダメージがボルテージアップのビンテージだった（意味不明）

壁に身体を預け、ズルズルと座り込む。

「ココで終わるか……」

まあ結果としてはなかなかだったかな。

本来死ぬ筈だった時期から大分生きてしまった、そろそろ終わりでも仕方ない気もする。

鞠川先生達は悲しむだろうけど、それは嫌だけど……でも俺も頑張ったと思う。

許してくれるだろう、もうゴールしても良いよって言ってくれるだろう。

そろそろ「奴ら」を叩くのも疲れてきた……終わりかな。

最後に一人だったのはやっぱり悲しいな、自分の弱さ見せつけられたようで、志半ばで負けてしまったようで。

悔しいなあ。

今度、今度転生するならば……こんな無様、晒したくない。

ああ、まるで誰かがタイミングを測っていたかの様に雨も降ってきた、これで俺は「奴ら」に喰われずとも死ねる。

「皆……こんな俺だったけど……今まであり……」

「おやおや、これはこれは……偶然にしては出来過ぎですねえ……もつとも、私はこの出会いを嬉しくも思いますが」

……おいおい、色々言いたい事はあるけどさ……俺セリフの途中だぞ、それともう死のうかなくなってしてたのに。

見えた、また見えてしまった…生きる光が。

第16話（後書き）

はいどうでしょうか、やっぱりオリジナル難しいです。

次も少しオリジナル入るとおもいますが、ご注意ください。

途中に出てきた暴走族ですが、ガソスタの時の奴とは関係ないです、石井君の勘違いです。

それでわ、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第17話（前書き）

こんばんは、いつのまにか17話です。

そろそろアニメに追いつきますね、まあまだですけど。

それでは、皆さんが楽しめたらうれしいです、どうぞ！

第17話

ああ、もう…嫌になる、嫌にもなろう。

なんてったって寝ようにも後ろで嬌声が聞こえ、前では先生が訳が分からない事を言っている。

先生とは勿論、鞠川先生ではない。

宮本に凄い嫌われてる事で有名な紫藤先生である。

さっき俺はその先生に拾われたのだ。

（30分程前）

「こんな所でなにを？石井君」

「見てわかりませんか？空気イスですよ」

「ほう、随分苦しそうな空気イスですね？」

うるさいなあ、俺だって好きでやってんじゃないよ。

それに空気イスって普通に苦しくない？決して楽な物でも無い気がする。

俯かせていた顔を上げると、紫藤先生はバスの運転席に座っていた。
…紫藤先生をエサにでもして生き残ろうと思っていたが…… コレは
好機じゃないかな？

「先生、バス空いてる？」

「ええ、空いてますよ、今から高城さんの家に保護してもらいに行
こうかと」

やった、なんたる幸運！俺生き残れる…良かった、本当に！

「先生、俺も乗せてつてくれませんか？」

「ん、んー…しかし、石井君達は私達から離れて行きましたよね？
ルールを守れない様な人は…」

そこで俺は紫藤先生の長つたらしいセリフを遮り…演技を開始した。

「先生…俺、皆から捨てられたんです」

「おやおや、毒島さん達が君を捨てたと？」

「はい」

な訳あるか。

「俺の役目は無いと、もう使えないから捨てる…」と」

あれ？半分くらいあつてゐる気がする。

「そうですね……災難でしたね、毒島さん達は酷い人だ」

「ええ、おかげでバイクで撥ねられるし酷い目に会いました」

「そうですね、しかし！毒島さん達はミスを犯した、それは君という逸材を手放してしまった事です」

なんか語りだしたぞ。

取り敢えず俯いとく。

「君は素晴らしい才能の持ち主だ、毒島さん達はそれに気付かぬかった……しかし！私にはソレを開花させることができます！」

だそうです、紫藤先生のカリスマが本当に凄い。

言ってる事は善そのもの、弱き物に救いの手を、ってね。

実際、紫藤先生的には生ゴミのリサイクルって所だろうが……それを今回は利用させてもらう。

僕だって皆と早く合流したいから、形振り構ってられない。

「あなたは私を跳ね除けた、しかし！私は君の事を買っていたのです、それに今は人手も少ない……どうです？私達と来ませんか？」

喜んで！と言いたい所だが、もう一押し。

「良いんですか？俺なんかが…」

「いいえ、君だから来て欲しいのです！来て、くれますね？」

「せ、先生…はい！」

決まった、こういうのは得意じゃなかったけどなんとかなるもんだね。

このまま皆と合流して、紫藤先生には悪いが利用させてもらおう。

と、俺は思っていた、簡単だと思っていた。

実際は、そうはいかなかったけど。

バスに入ってまずやたら熱気が籠っていた。

まるでライブハウスかなんかの様に蒸し暑い、理由は直ぐに分かったが。

後ろの席で少し見覚えのある顔の奴らが…えと……その…にやんにやんしてました、死語かな？

お互いに体を弄りあい、欲望のままに体を動かす。

あ、チョット待って…描写するのもキツくなってきた。

その後はひたすらソチラの方を向かない様に必死に無心になり、お前も参加しないかという変な誘いを断りつつけるという地獄のよう

な状態が続いた。

ようやく高城の家が見えてきた時、俺は本当に疲弊し切ってしまっていた。

トイレの屋根で寝泊まりし、淫乱バスの中では寝れず…身体が怠いのレベルを越えていた。

「おや？石井君、具合でも悪いのですか？顔色が悪いですよ」

そうですか、殆ど貴方のせいです。

なんて言えず

「はい、少し気分が…」と、当たり障りの無い返答を返す。

「そうですか、成る程、だから石井君は彼等との行為に参加しなかったのですね、気付かずにすみません」

なんか勘違いしてくれた、ブラボーだ。

はあ、と紫藤先生に聞こえない様に小さく溜息を吐く。

俺の言葉は結局、紫藤先生には届いてなかった。

今もなお、こうして訳の分からない宗教じみた事をやってる。

またまた俺は役立たず、か、もう慣れたよ。

けどま、もう少し我慢だ、もう少しで辿り着く。

皆の所に。

〈1時間程前　高城宅〉

私は、毒島さんが何を言っただか理解出来なかった。

いや、したくもない、そんな事…

「毒島さん…い、今…なんて？」

焦って言葉が詰まる、どうして？とそればかりで思考が纏まらない。

「鞠川先生、分かってください、私達は弱い物全てを守れる訳じゃ無いのだ」

「でもっ！！石井君を見捨てるだなんて！そんなの許される訳ないわっ！！」

正確には見捨てるとは言っていないが。

石井君がココに到着するまでもう待てないと、自分達も行動を起こさねばならないと…

だから見捨てる、もう待たない、生きてるかどうかも分からない仲間には待てない。

そう言ってる、毒島さんはそんな事をいつてる。

「許す許されないじゃない、許されなくても構わない、でも私達が生きるには石井君はココで切り捨てなければならぬ」

そんな…そんな事…

私は、悔しくて…悔しくて…言葉も出なくなった。

「すまない鞠川先生、こうするより仕方無いんだ」

「鞠川先生、僕もそう思います」

小室君まで…

「石井はきつと生きてます、生きてるなら必ず又会える、今はちょっと再会が伸びるだけです」

小室君……

「分かったわ、そこまで言うなら分かった」

「そうですか、分かって…」

「私はココに残るから」

一瞬、私自信も何を言ってるか分からなくなった。

ココに？残る？皆と離れて？

そこで気付いた、最低な事に気付いた。

皆と一緒にいきたい気持ちより、石井君の心配の方が強かった。

第17話（後書き）

はい、という事でした、半端に終わってすみません。
なかなか長くなりそうだったので途中で切りました、変でしたらすみません。

それでわ、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

第18話（前書き）

お久しぶりけましておめでとうございます。

長らく投稿できずに申し訳ありませんでした、これからもこんな状態かもです、すみません。

久しぶりなので、変なところあったらごめんなさい。

それと最後に、年もあけたので名前戻しました、変な情報すみません。

それでは、皆さんが楽しめたらうれしいです、どうぞ！

第18話

「ま、鞠川先生っ!？」

「私はココで石井君を待ちます、その後で皆とは合流するから」

もう決めた、誰が何と言おうと私は石井君を待つ。

ちょっと子供っぽいけど、我儘だつて分かつてるけど……石井君には怒られちゃうかもだけど!私は石井君を諦めきれない!

「駄目です鞠川先生っ!」

「どうして!?石井君だつて仲間でしょう!皆オカシイわよ!」

「バツカじゃないの!?そりゃあ石井の事は残念よ?でも……」

「残念つて何っ!!石井くんは死んでないっ!!」

「静香先生、落ち着いてください!」

落ち着いてられない、られるものか!一人一人の、頑張れば救えるかもしれない仲間を!

残念なんて言葉で片付けきれない!

もしかしたらこのまま仲間割れになるかも……そう思った矢先、ソレは否定された。

「先生！あたし達が生きる事も大切でしょう？ほらデブちゃんも黙ってないでなんとか…」

「毒島先輩、まだココを出ないんですよね？」

私達が言い合ってる間、じつと窓を見ていた平野君が突然、静かに口を開いた。

その場違いさ、あるいは冷静さに皆が静まり返った。

「……あ、ああ」

毒島さんもいつもと違う平野君に戸惑っているみたい。

「なら、来れば良いんでしょう？」

「…え？」

思わず聞き返してしまった。

「出発前に、石井が来れば解決だ」

その間もずっと窓の外を、いや、高城宅の門を見つめていた。

そう、私達が言い争ってる間も、私が石井君の心配をしてる間も、平野君は心の底から信じ続けていた。

石井の到着を。

私だって信じてた、けど心配もしていた、それは信じ切れて無かつ

たからかも。

「そうだな、それに高城の親父さんにも石井が来たら保護してもらえる様に言っところ」

いつまでも友を待ち続けてる平野君に、いつの間にか皆の思いも固まっていた。

石井君と仲の良い平野君が羨ましかった。

~~~~~

なんとか高城宅前まできたのだが、車止めをしていて、さらに門番らしき人影も見えた。

こんな状態で良く門番とかやってられるな、感心しちゃうよ。

まあ、紫藤先生の生徒の色仕掛けに引つかかるのはどうかと思うけど。

つまり、色仕掛けで門番を通り抜けた訳だ、俺としてはラッキーだった様なこれで良いのかどうか。

「つきましては、皆さんはココで待っていてもらっても良いですか？直ぐに中に移れますので」

え？…いやいやまってまって下さい先生、俺こんな所に居たくないですよ？

だってほら、周り皆イチャコラしてるんですけど…

1人だけ場違いだし、取り敢えず家の中に皆が居るのか確認したいな。

よし、そうと決まれば。

「せ、先生……」

ここ数時間でかなり上達したと思われる演技スキルを駆使して最後の芝居を演じる事にする。

「どうしました？石井君」

「すごく…具合が悪いです」

アッー、では無い。

「我慢は出来ますか？」

「すみません…あまり出来そうも無いです…」

「そうですね…すみません、この子は体調が悪いらしくて、一緒に中まで行っても？」

「ん、噛まれてる訳では？」

「私が確認した所、無いかと」

「ふむ、失礼…」

身体中弄られました、まさかほんとにアッーな展開になるとは…

「ええ、特別に構いませんよ、雨は体に悪い」

「ありがとうございます」

よおし！後は皆が無事にココに着いてるかどうかだな。

後ろから黙ってついて行く、2人は何やら世間話に夢中だ。

2人の話を聞いていると、どうも紫藤先生の父親は有名な代議士らしい、まあ今は選挙どころでは無いとか言ってる。

「どうか、生徒だけでも助けていただけないでしょうか、せめて自分だけで…」

そこで、紫藤先生は止まった、完全に言葉も出ない様だ。

おや？と紫藤先生の方を見るまでもなく、懐かしい声が聞こえた。

「随分とご立派じゃない？…紫藤先生！」

紫藤先生が喋れなかったのは首に銃剣を突き付けられたから。

突きつけてたのは……あれだ、宮……宮本だ、宮本、忘れていた訳

じゃあない、大体影薄いのが悪いんだ。

それは良いとして、宮本はどうも頭に血が登り過ぎてるせいかな俺の事は見えてないらしい、困った奴だ。

「み、宮本さん…御無事で何より」

お、皆来た来た、ご無事で何よりだよ本当に。

「い、石井君……」

「こんにちわ鞠川先生、お元気でしたか」

「石井くううんっ!!」

……走って来た、何故だか知らないけど鞠川先生が走って来た、バインバインですよもう。

って待て、このままじゃダイブじゃないか？前に乳窒息したよな、アレの二の舞になる!？

待てよ！横で！何やら言い合ってる2人の横で!？銃剣突き付けてますよ！鞠川先生には見えないんですかっ!？

仕方ない、と左脚を引いて構える。

「石井くあたっ!？」

ダイブの瞬間に頭にチョップを落とし、鞠川ボインアタックを阻止した。

「酷いネーミングね……」

「お似合いでしょう、それより宮本をどうにかしましょうよ」

あ、ごめんなさい……としよげる彼女を放置し、宮本と紫藤先生の話  
を聞く。

放置だ、所謂お仕置きと言うヤツだろうか？

それよか先生、屋根があるといえ地面に座ったら濡れますよ？勿論  
服がです。服が。

「心配したのに………すごく心配したのに……」

「すみません鞠川先生、2人の話が聞こえにくいので黙っててくれ  
ませんか？」

「………はい」

完全放置だ、放置プレイだ。

とにかく、鞠川先生は後で構ってあげるとして、今は宮本と紫藤先  
生の話を聞く。

「構ってあげるってっ！？私はペットじゃないわー！」

「ヤケに絡んで来ますね先生っ！！少しうつとおしくらいです！  
全く話が進まないのだから本当に黙ってください！」

「うつうつうつ………」

もう知らん。

そんなこんなしてる間に紫藤先生と宮本の話はある程度終わっていた。

紫藤先生は宮本を留年させた犯人らしい、紫藤議員（先生の親）が宮本の父親にどんな恨みを持ってたか知らないけど、醜いね。

ま、大人の都合を俺達子供が語ろうなんて十年早いけどさ、そのままでの意味で。

というか宮本、本当にこのままじゃ剣刺さるって、まあ大丈夫だろうけどさ。

「さ、殺人を犯すつもりですか？警察官の娘でありながら」

「あんななんか言われたくないわよっ！！」

「ならば殺すがいいっ！！」

落雷どーん。

良くわからんおっさんも登場した、なんかかけえ。

「アレは誰です？」

「うう、私だって…私だって…まだまだイケる年なのに…」

何の話だ、ついでにその後聞いたんだが、どうやら彼は高城のお父

さんらしい。

そしてその高城のオトンも紫藤議員と知り合いみたいだ。

そこで望むのなら紫藤先生を殺せと、宮本はどうするんだろな、大  
体答えは分かっているけど。

はあ、説明疲れた……そこ、主人公、出番作ろうとして飛び出そうと  
しない、拳句先輩に止められてるし。

「ねえ石井君……止めなくて良いの？」

だあってろ。

大体、こういう状況のは殺さないと相場が決まっているんだ、メイン  
ヒロインに殺しやらせてどうする、それも仲間全員の目の前だった  
ら尚更。

……だよね？

ほ、ほら！宮本も銃を下ろした、これでひとまず安心か。

「それが君の判断なのか？」

「……殺す価値もありませんから」

よく聞くけどかっこいい……でもさ、いつも思っただけどね、殺す  
のに価値見い出してどうするんだろ。

「お前は去れ！！お前の教え子と共にっ！！」

ああ、紫藤先生……やっぱり貴方はダメなんですね、そっち側に入ってます。

もうこっち側、小室達の方に来れない………残念です。

さよなら紫藤先生………「さあお前もバスに行けっ!!」

………え? あえっ!?! 俺も!?!

突然の言葉に某然と突っ立ってると両脇を抱えられズルズルと引きづられて………待て待てマテリアル!!………うむ、面白くない。

その後、危うくバスに乗つけられそうになり少し一悶着合ったが一件落着で。

紫藤先生からは凄い睨まれたけどさ。

## 第18話（後書き）

はい、変なところなかったでしょうか？無かったらいいんですが…  
というより長かったですね、今回、少し張り切り杉かもです。

それでは、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

## 第19話（前書き）

こんにちわ、コンディション最悪ですがこれだけは仕上げたいと思います。

皆さんも風邪には気をつけたが良いですよ？インフルエンザとか最悪です。

それは置いといて、次回あたりで最終話かもです、今日仕上がるかは未定です。

それでは、皆さんが楽しめると嬉しいです、どうぞ！

## 第19話

無事高城家に到着した俺だが、はっきり言ってする事は無いだろう。

寝る。

ええ寝ます、寝ますよお。

物語とか知りません、今本当に眠いから。

だってここん所ずっと働き詰めだからね。

部屋の場所を高城に聞いて、部屋へと向かう、鞠川先生も着いてくるかと思っただけとずっと携帯ピコピコに集中してるようだった、寂しくなんか無いんだからねっ。

どうでも良いので寝よう、心なしか熱っぽい気がする。

「昨日と変わらない今日、今日と変わらない明日はもう滅びた…か」

さっき先輩が話してくれた、皆も色々大変だったらしい。

取り敢えず今の所の行動方針は、小室、宮本の親探し、救助出来ればココに戻ってくる。

動けなさそうならどこかに立て籠もる、そんな所だ。

……止め止め、いっつも考え事ばかりだし、今くらいゆっくり休

もう。

そう思って、俺はゆっくり意識を手放し…………カーテンを閉めなかった事を後悔した。

なんだあの光、空で何か光が広がってる？歩く死体の次は天使様か？

…………気になって寝れない…

仕方なく下に降りて小室達と再会して話を聞く。

「小室、これはいつたい？」

「あ、石井、EMP攻撃って言うらしい、電気機器が全滅した」

なんと、ていうか誰がやったんだよそんなアホな攻撃。

…なにやら泣いてる様子の鞠川先生は今は構ってられん。

「な、なあ石井、そんな事より静香先生の事頼んだ」

……………。

「人が触れまいとしてるのに、それで？何で泣いてるんだよ、先生は」

「友達の電話番号思い出したらしいわ、それで電話中にバチンッ」

さっきの光で電話が使えなくなったと。

「折角話せたのに、ショックだったんじゃない？良いから早く行ってやんなさいよ」

だから何で俺がだよ。

「鞠川先生、私達が君を置いて行くと言った時、自分だけ残ると言っただけ……」

いきなり語らないでください先輩、支離滅裂ですよ。

「……ああはい、行きますよ、言っとくけど、小室みたいに優しく抱きしめるとか無理だから」

「俺がいつ誰を優しく抱きしめたっ！？」

「宮本とか？」

「……………」

何故先輩も顔を背けてるんですか？もしかして先輩もですか？

アホらしくなって鞠川先生の元に歩み寄る。

「うう……………」

「よしよし」

ありすちゃんは悪気無いんだろうけど、頭撫でるのはちょっと……

ていうか、それで良いのか先生！？その子20くらい下だけど。

「あ、和樹ちゃん……」

「や、ありすちゃん、と泣き虫おっぱい」

「うくっ……うう……」

駄目か、怒ってくると思ったんだけどなあ。

…しょうがないか、こんな状態じゃ車も運転出来ないだろうし…あ、車も使えないんだっけ？

ま、良いや。

そばまで近寄り携帯を握りしめてる鞠川先生の手を取る、しょうがなくて、役得じゃないぞ？

柔らかいなあ、とか考えない、俺エロゲの主人公じゃないしね。

「先生、大丈夫です、携帯使えなくてもまた会えますって」

「石井君……」

「だってあんな恐ろしい家の持ち主ですよ？鞠川先生の友達はきっと大丈夫です」

大丈夫しか言っていない俺、残念だけど情報も何もかも少なすぎてなに言えば良いのか分からない。

「心配なのは分かります、でも信じましょう？それしかないです」

その言葉に鞠川先生が目を見開く、どうした？何か変な事言ったかな？

「そっか、また私……信じ切れてなかった……そうよね、信じなきゃ」

「はい？」

な、何ひとりごと言ってるんです？怖いですよ。

「うん！ありがとう！石井君！」

「全く訳分かりませんけど元気になったようで良かったですで…痛い痛い！手え振りすぎですっ！」

俺たちが遊んでいる間に、高城のお父さんも現れ、皆でさっきの光の話を進めていた。

曰く、まだ使える車はあるみたいだ、乗っていたハンヴィーは死んだらしいけど。

ううむ、車での移動が難しくなったか、どうやって小室達の親を探すか…

いつもの様に思考に陥ろうとした時。

「ば、バリケードがつー！」

門の方でそんな焦った様な声がした。

おいおい、それはどういう事だよ？破られたって事？それじゃあ…

素早く鞠川先生の手を解き門の方を見ると、夥しい数の「奴ら」がこの屋敷に入ろうとしていた。

急いで何人かが門を閉めたが…アレだけの量に「奴ら」の怪力、恐らく殆ど持たないだ……ってぶち抜けた、流石に早いつて。

小室達がそれぞれ戦い始めた、俺もうかうかしてられない。

近づいてきた一体をまだ持っていた鉄パイプで殴り付ける、大分上手く殴れる様になってきたんじゃないかな。

囲まれそうになったら一旦距離をとるために下がる。

んで、銃でなるだけ頭を撃つ。

まあ、頭になんて滅多に当たりませんけどね。

「くそつ、きりがない!」

「全くだな」

「長引けばコッチが不利だわ!」

「弾も持ちません」

「ちょっと鞠川先生！うるちよろしないでください!」

「ええっ！？だつてえ……」

怖いのは分かりますけど逆に危ないですって、フレンドリーファイア的な意味で。

ん？何やら難を逃れた人たちが高城のお父さんの所に集まってるな、どうしたんだろう。

「はあっ！！……はあ」

鉄パイプを振り、一体を薙ぎ払った後、小室達と高城のお父さんの所に向かった。

話によれば、隣家はまだ大丈夫らしい、そこに行くとの事。

だとすれば、そこに行けばある程度安全か…もどって来た時はそこにでも行けば良いって事か？

「親孝行するのでは無いのかね、小室君…躊躇わず行くのだ」

「…はい！」

そつなるよな、ここに居ても話が進まないし。

「平野君……娘を、頼む」

「パパ！それってどういう……」

ぱあん、と高城ママは高城を殴った……何故殴った。

何やら言ってるけどそれも良くわからない、もう一度言っけど何故殴ったし？

「さあ、お行きなさい！！」

車も無しにどこへ？ママさん、さっきから言ってる事メチャクチャですよ？

と思っただらそうでも無かった、生きてる車があったらしい。

車庫の方へ向かうとどうやらダメージを受けてるらしく、出れる様になるまで少し時間がかかるとの事。

「ならば、ココを死守する他ないね」

先輩、たんたんと言いますけど結構数いますよ？

…はあ、しょうがない。

「行くか、うおおおおおっ！」

「あ、石井は鞠川先生達の護衛で、俺たちが外で「奴ら」を対処するから、撃ち漏らしたのを叩いてくれ」

「うおいコータっ！人が乗って来たって言うのにつ」

もう、それじゃあお役目務めさせて頂きますよ。

## 第19話（後書き）

お、次回短いかもですねコレ。

ラストスパートかけていきたいところです。

それでは、読んでくださった皆さんに感謝を！ありがとうございました！

## 第20話（前書き）

はい、開口一番すみませんでした！

なかなか書く暇も見つからなくて……まあ言い訳はアレですね。とにかくです、なんとか書きました、何時も通り下手ですが。

それでは、皆さんが楽しめると嬉しいです、どうぞ！

## 第20話

「松戸さん！まだ出せないんですかっ！？」

小室の焦った声が響く。

高城夫婦が幾らか「奴ら」を引きつけてくれているためか、「奴ら」の数はそれ程でもないが…やはりジリ貧だろう。

段々と小室達の撃ち漏らしも多くなってきた。

「コータ！少しこっちに來てる「奴ら」の数が多い！！もっと頑張らないと松戸さんが…」「やってる！！」

「皆！声を絞れ、少しでも「奴ら」の数を減らしていく」

「松戸さん！まだですか！」

「もう少しだ！！」

銃の弾は余裕はある、だけど……後ろを確認しながら戦うのはどうも…気が置けない。

「や、こ…來ないで……」

「っ！？鞠川先生！！」

まずい！？一匹逃したか？ちくしょうっ！！

俺の知らぬ間に「奴ら」が鞠川先生に忍び寄っていた、ここからじや届かない！？

な、なにか、無いのかっ！？

辺りを見回すとありすちゃんが動き出すのが見えて…ありすちゃん！？

「先生っ！！」

俺の心配とは裏腹に素早い動きでタイヤを転がして、鞠川先生に迫っていた「奴ら」の足止めをして見せた、ナイスありすちゃん！

トドメに向かおうとするが、それも心配なかったみたいだ、すぐに高城が向かってくれた。

「鞠川先生！中に！」

「ちゅうに？」

「中につ！！車内に入ってください！準備出来たら直ぐだして！その後皆を拾って脱出します！」

「う、うん」

く、まずい……あと少しだっと言っのに…

「松戸さん！！適当なところで仕上げちゃって下さい！もうもちません！」

「……分かった、ほんとなら……もう少し弄りたかったが……！」

良し、三十六計逃げるにしかず……！」

「コータ！もう良い！引いてくれ！」

「オッケー石井！……皆！撤退しよう！」

ぞろぞろと逃げて来、皆クルマに乗り込む。

「ん？松戸さん、乗らないんですか？」

松戸さん？どういづつもりだ？

自分が犠牲になるから皆、行け……！とかそんなのだったら要らないけど……

「惚れてる女が、皆と一緒に居るからね」

……すみません松戸さん、貴方の事見誤りました……凄いカッコイイです。

「いつくわよー！」

鞠川先生の掛け声と共にクルマが動き出す。

「ふー、何とか安心か……」

「石井、まだ気は抜かないで置いて」

「…ああ、ごめん」

周りはまだ「奴ら」だらけだったね。

クルマは直ぐに高城宅から抜ける、あっさり抜けれてちょっと驚いたけど。

「どこから逃げるの？」

確かに、目の前はバリケードとバスの残骸が邪魔でとても通り抜けれそうに無いけど。

「そこしかあるまいよ」

「……………先輩？狭過ぎです…ってうわっ!？」

言ってる間にクルマが傾きかけ始める……………ま、まさか……………バイク二台分位しか無いんだぞ！

「そのままっ!!！」

掛け声と共に更にクルマを傾けるべく、毒島先輩が車外へ体を出す。

そして車は二輪で走ってる状態のまま、バスとバリケードの間を抜けた。

うわ、本当にやっちゃったよ…流石主人公一行って事か。

はあ、本当に…ヒヤヒヤさせてくれるよ。

く少し後く

車内の空気は良好、一瞬最低にはなったけど直ぐに元どおりになった。

具体的に言うと、若干萎んでた高城を宮本が心配して、そんな高城をコータが諫めた。

普通の状況だったら不謹慎だったろう、けど今はこんな感じだ。

さっき俺が怒られた時みたい、高城も怒られたって事だ。

まあそんな事したら宮本が反応する訳で…コータと宮本が喧嘩でもしそうになったって訳だ。

でも実際は高城がコータを支持し、事が終わった。

きっと高城にとっては良い切替になったんじゃないだろうか、コータは少し不憫だったけど。

ほんと、こういう悪役似合っちゃうからなあ、コータ……コータの春はまだまだか。

つとと、そんな事よりいまは。

「先生」

「あ、石井くん、どうかした？」

「エンジンの音、何か変じゃ無いですか？」

バチっ！バチっ！と時々音が鳴っていた。

まあ、無理矢理切り上げてきたから仕方ないんだろうけど……ココで車が無くなるのはキツイ。

「なんだかお車調子悪いみたいなんだけど……何処まで行けば良いの？」

「そうですね……高城」

「いきなり他人任せ？まあ私に振ったのは正解ね」

「俺には決定も提案も出来ないから高城に丸投げしてみました」

「ああそう、ついでに言つとくとあんたも仲間なんだから決定権くらいあるわよ……もっと自信持ちなさい、良いわね？」

……善処する。

そんな言われてちょっとだけ嬉しかった訳だが、何やら皆が俺を見ている……心配そうに。

俺が自分の事を役立たずとか思ってる事は、皆にとっても問題だったようだ……これは駄目だな、本格的にどうにかしないと。

「ま、それも置いといて……出来るだけ走らせて、孝と宮本の親探しを最優先で」

ま、そうなるね、その後で先生の友達や安全とかだろう。

「っ！間もなく国道だ！」

「？先輩、国道がどうかしたんですか？」

「は？はあ、きみはまったく…」

呆れられてしまった、これは俺が悪い、頭を下げる。

「すみません先輩、どういう事なのか教えて貰えませんか」

「そこまでしなくて良いっ！！」

今度は酷く焦った様だ、どうすれば良いんだろう。

「国道、今までならどういいう物だった？」

「えーと…よく消防車や救急車が通ります、車も多いです」

「…まあ間違いでは無いな、その認識で構わない…車が多い、つまりどういいう事だ？」

車が多い？さっき先輩が今までならって言ったという事はつまり…  
…過去形、今は違っって意味だよな。

車が多いって事は車が障害物になってる？いや、それなら先輩が注意を皆にうながす程か？さっきだって抜けてきたしね。

全てが終わり、死んだ人は「奴ら」となる今……死んだ人は「奴ら

「に？ああそうか！

「車を運転するのは人、つまり国道に行けば「奴ら」が増えるのは必然！」

「正解だよ、及第点と言ったところか…」

「いいえ、タイムオーバーよ、コータでさえ分かってたんだからすみません。」

とか言ってるうちに到着、予想通り「奴ら」の数が半端じゃない。

その先に見えるのはショッピングモール、恐らくそこで食品などを確保するつもりか。

それにはここを通るしかないか。

「この数をひいて行くのは無理みたいだ、転倒してしまう」

「という事は……ほら、孝」

「え？あ、ああ……ったく」

目の前に広がる「奴ら」の群れ、こいつ等を突破する事にしたらしい。

また無茶するつもりか、ここまで来たらもう仕方ないな！俺もやるしかない。

「鞠川先生、行きましょう！」

何だかんだでここまで来たんだ、鞠川先生の悲しい顔なんて見たくないからね、その為にも俺はまだ生きる事にしよう。

「うん！石井くん！」

いつもでもその笑顔を忘れないで貰いたいよ。

と、俺の解説はここまでだ、後は主人公に閉めてもらおう、脇役は最後まで脇役で良い、そうだろう？

だって、俺は石井だから！

「面倒くさいよー！」

あの日、世界の終わりが始まった……そして今は、全てが終わってしまったのかもしれない。

それでも、いや、だからこそ俺達は、出来うる限りの事をするだろう。

いつかまた、変わらない毎日を送る為に。



## 第20話（後書き）

THE 打ち切り！！

すみません、TV版沿いということまでです、長い間ありがとうございました。

続きは…せめて新刊出たらかな。

作者は次の作品も考えてはいますが…まあホントに暇なときとか、ふと思い出したときにでもどうぞ。

ここまで読んでくださった方にもココだけ読んでくださった方にも極上の感謝を！

本当にありがとうございました！ではまた！

## 外伝1（前書き）

簡単にいうとエピソードです。  
それと、一発目なんで期待しないでね、作者もイミフな内容です。

## 外伝 1

外伝 1

「石井、もう放課後だよ？」

「……ん、んん」

起きたばかりの、焦点の合わぬ目をぼうつと彷徨わせる。

午後、丁度温かくなってきたそれが、眠気の魔力を持ってる事は皆もご存知の事だろう。

その魔力に耐えられず、眠ってしまう生徒は大抵夜更かししている様だ（金曜の午後は別だ、魔力が高過ぎる）

だが、この俺石井和樹は別に夜更かししていた訳では無かった。

それに、勉強頑張ったりベッドでほにやら頑張ったりしてもいいい。

では何故こんなにも無償に眠たくなっているのか……その答えを俺は聞きたい。

誰にだよ。

「最近そうやってるよね？大丈夫？」

そうやって後ろを見てきたコータ。

高校に入って、最初の友達だ…少し弄られキャラ的な感じで、ちょっとオドオドしてる。

それと銃が好きで、銃の話になると人が変わる……変な奴だが、大事な友達だ。

先生が丁度教室を出てったので、コートが完全にこちらを向く。

「鞠川先生に見てもらおう?」

「ああ行ってくる、どうせ保険委員なんだから行く予定だったしね」

「あそつか、またね石井」

軽く手を振り、コートと別れる。

寝不足のせいか、ガンガン痛む頭を抑えて保健室に向かう。

「っ痛っ」

寝不足は今に始まった事ではない、一週間前からだ。

実は、なぜ寝不足なのか原因は分かってたりする。

夢を見る、嫌な夢を。

「鞠川せんせ、こんにちわ」

「あ、石井君こんにち……ひょえっ!? な、なになに!? どうした

のっ!？」

貴方がどうしたんですか。

「石井君、酷い顔してるわ……こっち!」

流石校医とでも言うべきか、俺の顔で異常を確認するなりベッドを整え出す。

「いや、でも……」

「良いからっ!」

……はい。

黙って寝る事にした。

「原因は分かってるの?」

自分が寝不足で頭が痛い等の話を終え、その原因の話になったのだが…。

「それは、おかしいんじゃないの?原因が分かってるなら対策だつて」

どうも鞠川先生は俺が物理的な理由で寝不足してると思ってる様だ。

「夢を、見るんですよ」

「ゆめ？」

顎に手を当てて、分からないと言った風に首を傾げた…可愛かったな。

「ええ、とんでもない、現実ではありえない夢です」

「どんな？」

「街が、ゾンビで覆われるんです…皆皆ゾンビになって…コータも先輩も小室も母さんも、鞠川先生もゾンビになるんです」

すうっと、室内の温度が下がった様な…変な感触。

早く言わないと。

「…確かにそれは嫌な夢だけど、夢は夢でしょう？」

そう、そうなんだ…そこが重要。

「俺、段々夢に引き摺り込まれてるんですよ」

「引き摺り込まれる？」

何か、嫌な予感でもしたんだろうか…先生は、俺の寝てるベッドから少し後ずさった。

「ええ、毎日毎日そんな夢を見て、深夜に起きて朝まで寝れない……それを繰り返してる内に、段々段々現実と夢の境界線が脆くなってる事に気付いたんです」

「石井君、待つて」

待つて？無理ですよ、止まりませんよ。

いつしかガタガタ鳴り始めた歯を食い縛って続ける。

「全部死んでるんです、周りの物全て、死んでるんですよ」

「死んでないわ！」

意を決したかの様に先生が肩を掴んで来た。

「石井君、石井君！！どうしてさっきから私の方を見ないの！何か理由がっ……」

「だって！……崩れかけの先生の顔なんて見たくありませんよ」

ひっ、なんて可愛らしい悲鳴が室内にこだました。

いつも通り、2人でたわいもない話をして、作業をするんだと思ってた。

私はそれが楽しくて、大事な大事な時間だった。

けど、今日の石井君は変だった。

いつもの元気な笑顔はそこに無く、俯きビクビクしてる彼がいた。

夢を見る、と言った。

夢が彼をおかしくさせたのか、私には分からなかった。

でも、なにか狂気に取り付かれてる彼を、私は救いたかった。

でも、どうすれば良いんだろう？突然の展開に頭も働かず、石井君の肩を掴むしか出来なかった。

「た……………」

…え？

「助けて、鞠川先生」

…こんな時でも、彼は私を頼ってくれてる…

「助けるよ、絶対」

だって、私だって!!

「石井君のそんな姿、見たくないからっ!!いつもの石井君が見たいから!」

自然、石井君を抱きしめて、2人でベッドに寝転ぶ。

「せ、先生…嫌だ、もう夢を見たくないんです」

呻く様に意味をなさ無い言葉を、石井君は吐いてた。

でも、そんな夢、もう見させない。

「大丈夫、私が一緒に居てあげるから、安心して」

「先生…」

崩れた、感情の果てに。

優しい歌が聞こえた、先生の優しい声が。

先生の子守唄は、なんだか不恰好で、本当はそんな歌い方じゃない気がした。

でも、その日から俺は…幸せな夢しか見なくなった。

「って話なんだけどさ」

「はいはい、石井ってばエロゲのやり過ぎをそうやって取り繕わない」

「うぐっ、バレたか」

「ったく、本当にもう、だから寝不足になるんだよ」

「はいはい、気をつけますよー…んじゃ俺こっちだから」

「うん、またね石井」

軽く手を振り、保健室に向かう。

そう作り話、俺が取り付かれた狂気も悪夢も作り話さ。

エロゲやって悪いかよ、鞠川先生には内緒だけどさ。

ガラガラッと保健室に入る。

「こんにちわ！鞠川先生！」

「こんにちわ石井君……うんうん、やっぱり石井君は笑顔が1番ね、ふふっ」

……作り話だよな？

## 外伝1（後書き）

続くと良いなあ。

ヒマなら感想お願いします、暇なときで良いので。

## 外伝2（前書き）

どうも、このまえぶりです。

先日書いた駄作、ひどかったですね…自分で読んでなんだこれ？って思いましたもん。

まあ、その駄作を踏み台にして生まれた外伝2です、全部布石だったんだよ！ってことにしてください。

クオリティは相変わらず、ちょっとやばい描写あるけどToooveる読んだ後だと鼻で笑われるレベルだし、大丈夫だと思います。本編のイメージ潰したくない人はバック推奨ですよ、ではどうぞ。

## 外伝2

退屈だった。

暇で暇でしようがない。

特に、帰りのS H Rがショートホームルームあつてるこの時間は。

自然と、彼の事を考えてしまう。

石井和樹。

最初に会った時はいつだっけ……忘れちゃったけど、私は石井君の名前を覚えられなかった。

けど、話してるうちに、一緒に作業してるうちにそんな事も無くなってきた。

そのうち、石井君と一緒にいる時が一日の1番楽しい時間になった。

「…遅いなあ」

ちらつと時計を見ると、まだH Rであろう時間帯。

ちっとも遅くないのは分かり切ってた。

でもこう、訳もわからず焦れてた。

なんだろう、最近特に酷い。

生徒が来ない限り、私はプリントやらの整理をしてたりするんだけど、何時の間にか手が止まっていたり。

子供かつ！と自分に喝を入れてなんとか持ち直すのも毎日。

どうしちゃったのかな。

思案に明け暮れていると、コンコンツ、と扉を叩く音が。

一瞬体が硬直し、心臓が高鳴った。

落ち着こう、私、石井君とも限らないのに………バカみたい。

「よいしょ」

おっさんの様に声をだしてバックを持ち上げる。

今日はやたら重い。

「うおっ、持って帰れるかなコレ」

「先生がいきなり置き勉チェックとか言い出したからね」

そういうコータは余裕そうだな。

「当たり前、僕はあんまりしてないからね」

「この優等生」

「なんとも言うが良い」

たわいもない話をしながら下駄箱まで行く。

「それじゃ」

「ん、じゃあね」

別れて、保健室へと足を向ける。

さて、今日はどんな仕事するんだろう。

最近、鞠川先生のとびっきりの笑顔がよく見える。

最初の頃は、困った顔や苦笑い等の顔しか見れなかったからね、役得と思っておこう。

コンコンツ、といつものノックをしようと手を伸ばした……んだが、それはかなわなかった。

中から足を怪我したらしい生徒が出てきたのだ。

その生徒はぺこり、とお辞儀して駆けていった。

保健室内からすぐ

「……お大事に」

なんて声も聞こえる。

生徒の顔が強張ってたのはなんでだろ？それと鞠川先生の声が不機嫌だったのはなんでよ？

と、とにかく入ろうか？

「失礼します…」

なんて思わず畏まってしまった、それがいけなかったのか。

いきなりこちらを睨んできた。

「こんにちわ…は？」

へ？

いつもの鞠川先生ならそんな事気にしないのに、本当どうしたんだろ？

「こんにちわ…」

「……………ふん」

小さく鼻を鳴らした後、こちらに見向きもしないで作業を始めてしまった。

仕方ないので俺も作業に取り掛かる、鞠川先生の力が必要な所は後回しだな。

そうして数分。

ちら、ちらちら、とあからさまにこちらを伺ってきた。

もうちょっと隠せないのか。

いやーな沈黙の中。

さらに数分が経過した時、やっと鞠川先生がポツリと声を漏らしてくださった。

くださったんだが……

「石井君がわるい……」

訳わかんねえよっ！！なんてキャラも考えずに叫びたくなる俺を、どうかお許し下さいママン。

「さっきの子」

え？……… ああ、足を怪我した生徒か。

「あの子より遅かった……」

「だからどうしたんです？」

「石井君が悪い」

だから訳わかんねえよっ！！と叫んでしまった俺を、お許し下さい  
パパンっ！！

鞠川先生は俺の大声にビクツとしながらも、また睨んできて。

「だ、だってだって！私がバカみたいでしょっ」

「確かに今の先生はバカみたいですね、言葉のキャッチボールって知ってますか？」

「し、知ってるわよ！それくらい知ってる！確か、えーと…」

「そこに食い付かなくて良いですから！」

「じゃあ私どうしたら良いのっ！」

なんでそんな切羽詰まった顔してるんですか…はあ。

「さあ？俺におっぱい揉ませれば良いんじゃないんですか？」

「うん、分かつ……って、ええええええええつ」

うるさ。

「駄目ですか？」

「駄目ですかつて……それは、その…」

「……分かってました、先生が触らせてくれない事くらい」

「なんで石井君がシリアス入っちゃったのっ!？」

「良いんですよ、もう……さよなら先生」

「ええっ、そんなの駄目っ！……えと、あのその……分かったわ、ちよつとだけなら触っても……」

「さあて作業作業、プリントどこだっけ」

「私の決意返してええええええええっ！！」

なんやかんやでいつも通り、良かった良かった。

下校時間。

皆が部活を終えた頃、静かに席を立つ。

「さてと、俺もそろそろ帰りますね」

「あ、まって石井君」

「はい？なんでしょう？」

もう既に普段通りの、のほほん鞠川先生になってるんだが。

なんか嫌な予感。

「こ、これから暇？」

「はい？」

場所は変わってファミレス、どこの家も晩御飯の時間なのか、店内はわいわい賑わっている。

そこに、俺こと石井もいる訳なんだ。

でも、普通なら目の前に父上と母上がいらっしゃるはずだが。

そこには楽しそうにメニューを見ている鞠川校医のお姿があった。

「ねえねえ、どれ頼む？」

なあんて事聞かれても俺の耳にはさっぱり聞こえてこず、ただ脳が状況を把握しようと務めるばかりだった。

いや最初からこうだったんじゃない、少し思考してると。

俺と鞠川先生、まるでカップルじゃあん。

なんて思ってしまったのがいけなかった、そう最悪だ。

そっからドツボ状態で、目も合わせれない、話はどもる、拳句先生との関係まで忘れちゃうなんて訳の分からない事まで（生徒と先生だろうがっ）。

どん、と目の前に置かれたカルボナーラ。

このカルボナーラも俺が無意識に頼んだ物か、それとも鞠川先生が頼んだものか…。

まさかコンディション最悪の俺の為に「しゅわっち！助けに来たぜ！」って来た訳でもないだろう。

どんなカルボナーラだよ、俺本当におかしいって。

「雨、降って来たわね…」

鞠川先生の呟きにふと外を見ると、まるで俺の下心に天が怒ったかのような激しい雨が。

「濡れますね、送って行きましょうか」

おい、鞠川先生のクルマでここまで来たんだろ？何言ってるの俺！。

「ふふ、ありがとう、でも困ったわね」

帰れない、と外を見つめる鞠川先生を俺は見つめる！！

……………だから何してんだ俺！？

「あ、そういえば近くにホテルがあったわ」

……………え？

またまた場所は変わってホテル、でも普通のホテルじゃあない。

分かってるだろ？ここまでくれば誰だって分かるだろ？ほら、ベッタベタの奴だよ、《休憩》とかあるホテル。

俗に言うラブホテル。

愛の巣窟なるそこに、鞠川先生と2人でいる。

以外にも、さつきよりは冷静だった。

そうだ、家族に電話しよう…心配かけたら嫌だもんな。

幸い明日は学校は休み、そこら辺は大丈夫だ。

「もしもし？母さん」

「和樹？もうご飯食べたの？」

「食べたんだけどさ、その後そいつの家で泊まらないかって話になっちゃってね」

「あらそう、その子のお母さんに宜しく言っというてね？」

「うん、じゃ」

ぶつり、と電話が切れる。

沈黙、シャワーの音しか聞こえない……。

入ってるのは勿論鞠川先生、覗きません。

別段、する事もないので部屋を探索する。

本当にラブホテルか？と言いたくなる様な普通の部屋、TVも付いてる、窓からの景色は最高、オマケにベッドが二つある！！（少し残念だ）

結局イスに腰を落ち着ける事になったけど。

「石井君もシャワーつかう？」

何時の間にか出てきたのか、髪をタオルで拭いながら近寄ってきた鞠川先生、バスタオル一枚ではない。

「あ、えつと……」

風呂上がりのせいか、火照った体にいつも以上の色気、こちらに向ける笑顔にクラッときた。

もうそろそろ理性が限界ですよ？

ボスン、とベッドに倒れて

「柔かい」

とかやってる先生に近付く。

このまま、ヤっちゃったらどうだろう？

鞠川先生は悲しむかな、両親も悲しむだろう。

ていうか、もうこんな事しか考えてない自分が哀しい。

でも先生が誘ってきた、そうだそうだ。

男の前なのに！俺だって男だ！

段々ライラしてきた。

野生を縛る、理性はいらないっ！

先生が悪いんですよ？俺をいつまでも子供だ生徒だと思って。

「せんせ」

「なあに、石井く…きゃっ！？」

がつ、と肩を掴んでベッドに押し倒す。

「先生、俺は悪くないんです」

「な、なにが…？」

まだ状態が分かってない様だ、はっきりと言ってやるっ。

「今から俺、先生の事犯します」

「……………そっか」

ん？もつと抵抗があるもんだと思ってたんだけど。

そんな疑問に答えるかのように、鞠川先生がポツリと語り出した。

「私ね、リカに……………あ、友達にね、相談したの…石井君とどうしたら良いって」

「……………」

どうしたら良いって、どういう事です？

「生徒なのに、10も年が違うのに、石井君の事好きなんだろうって言われた」

！？

「それで始めて、私は石井君に惚れちゃったんだって知った」

そ、そんな……………。

「石井君、好きです」

あ。

なんだこれ、なにこれ？まってまってまってまって。

あ、そうだへんじ、へんじしよう。

「あ、え？う……俺も好き……です？」

訳わかんなくなつて、汗で見えなくなつたメガネを放る。

熱い、クーラーついてたよな？

よし、もう駄目だ。

「良かった」

「先生……」

「石井君……」

ベッドの上、二つの影は重なつて……

「って言う小説なんだけど、どう？」

少し恥ずかしいくらいの妄想だが、小説にしたら……っていつ話をこの子にしてみたんだけど。

「…早く結婚しろばけ」

「え？なんて？」

「いいえ、ではまた」

そう言うと、足を怪我した生徒は駆けていった。

走れる位なら、大丈夫よね？それよりなんであの子に変な話しちゃったのかな、退屈のぎにはなっただけ。

入れ違うように、石井君が入ってきた。

自然と笑顔になるのが自分でも分かって、楽しい時間が来た！と意味もなくワクワクして。

いつもの石井君の笑顔を見る為にそちらを向く。

しかし、なんだかいつもと様子が違う。

「あのっ！鞠川先生！」

「は、はいっ」

石井君の大きな声に、ビックリして敬語になっちゃった。

「俺、頑張りますからっ！！絶対いつか、鞠川先生の隣に行けるその日まで！！」

そういうと、いつもの雰囲気に戻って、席に着いてしまった。

あ、あれ？私の妄想……よね？

## 外伝2（後書き）

とりあえず完結かな？

続きやる時はやるかもです、見込み無いけど。

そのうちまた新しいのも投稿するとおもうので、良かったらそっちも見てやってください。

ではまたいつか！。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7875o/>

---

学園石井録

2011年6月30日19時56分発行